

黒死病の天使

登場人物紹介

ルブル 世界破壊の組織「ダート」を創設する。 魔女 能力 カラプト
世界の片隅にて森に囲まれた魔女の城に住まう。
メアリーとは恋人関係。

メアリー 魔女の召使 能力 マルトリート
世界破壊の組織「ダート」を創設する事を主であるルブルに提案する。
魔女の館にてルブルの召使をしている女。

同性愛者。
ルブルとは恋人関係。

セルジュ 能力 映し鏡

ダリアという女に失恋し、夜の街にて後を付けていた処、
メアリーに興味を抱かれて、
ダリアと共にさらい、ダリアの肉体に自身の脳を入れられて、
恋する女の肉体を得た男。
組織「ダート」のメンバーになる。

アイーシャ 能力 ネクロ・クルセイダー

ルブルの作り出すゾンビの集団と、
幻影使いメアリーに敗れ、敗北し、
魔女の城にて、メアリーによって玩具にされる。

ケルベロス 能力 アケローン

黒いコートを纏った筋肉質に精悍な顔の男。
能力犯罪者を収容する「アサイラム」の暫定的所長を務めている。

インソムニア 能力 ダンス・マカーブル

能力者ギルド「ドーン」の強力な能力者の少女。
ゴシック・パンクのファッションに身を包んでいる。

グリーン・ドレス 能力 マグナカルタ

炎使いの女。
先の戦闘でボロボロに傷付き、川沿いで倒れていた処をメアリー達に助けられて、
「ダート」のメンバーに加わる。
赤い髪に、竜の鱗のような甲冑を身に纏っている。

ウォーター・ハウス

グリーン・ドレスの恋人。
過去のエピソードで死亡している。

イゾルダ 強大な力を持つ人型の生体兵器。 能力 イーティング・スター

大柄の男の姿をしている。

メビウス・リング 能力 ウロボロス

能力者ギルドである「ドーン」の創設者。
人間サイズの黒いドレスを纏った金色の巻き髪をした球体関節人形。
(他、登場作品、ゴシック・アナトミー、ヴァンパイア・パロールなど。)

狂人は狂人を呼ぶのだろう。きっと、それだけは確かな事なのだろう。自分は、どうしようもないくらいに狂っていて、だからこそ、彼女は彼を呼び止めたのだ。引き寄せてしまったのだと言ってもいいのかもしれない。

「あの娘の事が好きなのね？」

メアリーと初めて会った時の事だ。

その日は、夕暮れだった。

街頭で、ダリアを遠くから眺めていた時だった。どうしようもない程の嫉妬心に苛まれていて、どうすれば、あの女を殺せるか、ばかりを考えていた。

その感情をどうしても、止められそうになかった。何度も、自分の醜悪な気持ちを押し殺そうとした。他の事をやって、気持ちを消し去ろうともした。

けれども、どうしても駄目だった。

だから、何とかして、ダリアという自分を傷付けた女に、復讐してやろうと思ったのだった。

「あら、貴方、ストーカー気質なのね。粘着的で嫉妬心が強くて、被害妄想も強くて相手に嫌悪されるタイプ」

「ああっ、何だよ？ 俺はそんなにおかしいのかよ？」

「私好みの素敵な人だって言っている」

メアリーは、嬉々として、そんな事を断言した。彼女は買い物籠をぶら下げたまま、しばらくの間、ずっと彼に対して付き纏っていた。

セルジュはずっと、付き纏ってくる、この女を仕方無く、好きにさせる事にした。

どうやら、メアリーは、ある城の主のメイドをしているとの事だった。生活必需品を買った帰りに、たまたまセルジュを見つけて、興味を持ったとの事だった。

ストーカーのストーカーというのも、何だか変なものだなあ、とセルジュはその時は思った。滑稽以外の何物でも無かった。

メアリーは、セルジュの想い人である、ダリアについて、深く追求した。セルジュは煩わしいながらも、丁寧に答えていった。

そう、ダリアは同級生だった。

自分が女に対して、恋心なんて抱くなんて思ってもいなかった。

そういったものは、それこそ軟弱なものだと思って、セルジュはひたすらに、勉学を学んで、エリートの道を歩み、将来は、弁護士か国家公務員にでもなりたかった。

内向的な彼は、ひたすらに、頑強な肉体を持つ者や、野蛮な性格をしている者達を嫌悪していた。

そんなわけで、彼は友人が少なく、ずっと暗い青春を送り続けていた。

恋愛感情なんかには惑わされる自分が気持ち悪くて仕方が無かった。

結果、上手くいかずに嫌悪された。

セルジュはダリアが憎くて仕方が無かった。自分の事をもっと理解して欲しかったし、愛して

も欲しかった。

けれども、セルジュは彼女に拒まれた。

まるで、返事などしてくれなくなってしまった。

ひたむきに、妬み、恨んだ。

けれども、毎日、毎日、片隅にダリアの顔と声が重なる。

どうして、上手くいかなかったのだろう。そういった後悔の念ばかりが重なっていく。

けれども、時間は巻き戻らない。

セルジュに少なからず好意を抱いていたダリアはもはや、存在しない。まるで、別の何かが無依したかのように、彼女の顔をした蠟人形か何かが無言無語のように、ダリアは冷たい視線で、セルジュを害虫でも見るかのような眼で拒み続けるのだった。

そんな時だった。

メアリーは颯爽と現われた気がする。

「あの女の人格消して、あの女の身体に入り込んじゃえばいいじゃない？」

「お前、何言っているんだよ？」

セルジュは、メアリーという女の言っている事は、最初、質の悪い冗談なのだと思った。

「私だったら、そうするわ。それが純粋な愛の形だと思っているから。踏み躪ればいい。彼女の心が手に入らないなら、彼女の心なんて消し去ってしまえばいいの。貴方が彼女になるの」

セルジュは、彼女が何を言っているのか、まるで分からなかった。

「“ルブル”が創り出したものが、闇市で売られている。私は気の合うお友達が欲しい。ねえ、貴方のお名前、何て言うの？ 貴方、見込みありそうだから。もしよかったら、私達の仲間に入らない？」

そう。

悪魔の甘言に魅入られてしまったのだった。

その日から、セルジュの人生は全て変わってしまった。

こんな者達が、この世界に存在しているとはまるで思わなかった。

けれども、今の自分を安心させているのは、メアリーなのだ。

何処までも、堕ちていこうと思った。

十

鏡の間。

それはルブルという名前の“魔女”の城の中にある、セルジュのお気に入りの場所だ。というよりも、この部屋は、魔女から彼に与えられた特別な場所なのだと言ってもいい。

彼は自らの容姿を舐め回すように見ている。

四方に、鏡が張られている。

かつて、好きだった女、ダリアの姿が鏡には映っていた。

セルジュは、彼女の肉体を乗っ取って、メアリーの仲間として、“この城”の中に住んでいる

のだ。

“魔女”の作り出した道具が、手術を行ったのだ。

頭蓋を切開して、脳を交換する手術だった。

セルジュの強大なまでの嫉妬が、メアリーという魔女の召使の食指を動かして、セルジュは、片思いの相手であるダリアの肉体を手にしたのだった。

今は、とにかく、自分の肉体が好きで堪らない。

恋焦がれて独占したかった女の身体だ。大事に扱わねばならない。

そのうち、ルブルに頼んで、自己再生能力を持つ肉体にしようと考えている。ただ生活しているだけでも、小さな怪我などは引き起こしてしまう。

部屋の中央には、大きなスクリーンのTVが置かれている。

彼は映画を見るのが、とても大好きだった。

彼はくちやりくちやりと、大きな皿に盛ったチェリーとラズベリーの束を口にしながら、スクリーンに魅入っていた。

彼はどうしようもない程に、純愛の劇が大好きだった。

とてつもないハッピー・エンドに終わる恋愛の話が好きだった。

不幸な結末なんていない。

今が幸福だと信じたいからだ。

イゾルダはソファーに寝転がりながら、いつも何かしかの本を読んでいた。

彼は、右目を髪の毛で隠した男だった。肉体は筋骨逞しかった。

そして、とても寡黙な男だった。

いつも、真っ黒なマントを纏っている。

そして、よく花瓶に花を入れていた。何の種類の花なのかは、セルジュには分からない。イゾルダいわく、自分で品種改良した花らしかった。

花は美しい薄桃色をしているが、何処か歪で不気味だった。

「なあ、イゾルダ。いつになったら、俺達は侵略戦争を起こすんだ？」

「知らん。メアリーに聞けよ。“何よりも邪悪な精神”を集め、“何よりも世界を憎悪の渦で満たしていく”らしいが、あいつ、本当はあんまりやる気が無いんじゃないのか？ ルブルといつも、イチヤつきやがって。何なんだろうな、あいつらは」

セルジュはそんな風に、イゾルダに軽口を叩く。

二人共、何だかんだで、今の生活に満足していた。

セルジュはメアリー達のお陰で、自分の望みが叶った。だから、彼女に対する不快感はこれといって無い。

イゾルダの方も、自分の居場所が見つかって安心しているのだと言った。彼は、いい加減に一人で多くの“能力者達”を返り討ちにするのには疲れ切っていたのだと言う。

どうやら、特殊な力を有している者達は、この城の外に、何名もいるらしい。

興味はそそられるのだが、どうにも、怖いなあ、と思う二つの感情が、セルジュの中で、錯綜していた。

結局の処、ルブルは人体実験に熱中する余り、人間の征服に関しては深い関心は無く、メアリーの方も、いい加減な指揮系統ばかり取っていた。

ただ、みんな自分達は異質で異形な精神の持ち主である、という事を共有したいだけだった。

それに、人間征服を行う為のリスクはそれなりに高かった。

何処に敵対する強力な能力者が隠れているのか分からない。

きっとみんなが、此処にいるのは、もっと単純な理由だ。

みな、居心地の良い空間に満足していた。

純粋に楽しい事をやりたい。

そんな想いだけで、侵略を始めている。人々を踏み躪る事を考えている。

十

何が幸福なのか、何が不幸なのか分からない。

その意味さえも知らない。

きっと、この城の中にいる者達は、みなそうなのだろう。

.....

ルブルという黒尽くめのドレスを纏った女が、この城の主だった。

彼女は、死体を集めるのが好きだった。

動物も、昆虫も、人間も。彼女はとにかく、色々な死体を集めるのが大好きだった。

そして、ルブルは、所謂、魔女だった。

“ネクロマンサー”とでも言うのだろうか。

ルブルは、死体を操作して動かす事が出来た。彼女の意のままに、死体達はゾンビとして動き出す事が出来るのだった。

城は十数階建てで、部屋や別館が幾つもあった。

ルブルと、彼女が集めてきた住民達には、有り余る程の広さだった。

そして、この城の全てが、ルブルの集めてきた死体を変形させて作り出されたものだった。テーブルや椅子、戸棚、キッチン、調理器具、ソファ、カーペット、花瓶、壁に掛けられている絵画、それらの殆どが、ルブルが集めてきた死体を変形させて創り出したものだった。

広間や客室、テラスや礼拝堂、果ては厨房や浴場まで、人や動物の死体で作りに上げているのだという不気味で仕方が無いのだが、普段は、死体達は眠りに付いているらしい。つまり、ルブルが意識的に動かさないと、死体は死体のままで、ただの物質としてしか機能していないみたいだった。

しかし、やはり、ソファやベッドに寝そべったり、椅子やテーブル、皿やナイフを使ったり、浴場のバスルームやシャワーノズルなどが、全て人の死体で作られているのかと思うと、怖気がするものがある。ずっと住んでいても、中々、慣れないものだ。

例外はセルジュ達が、城の中に持ち込んだものだった。

部屋を覆う鏡は、特注で作らせたものだったし、映画を見る為のスクリーンも、彼が個人的に

持ち込んだものだ。

それから、食料品や水などは、流石に、死体ではなく、ちゃんとした市販で売られているものだった。

メアリーは、城のメイドというものをしていた。

彼女は、よく城を出て、城の周辺の森を抜け出して、街へと買い物に出掛けていった。そして、城の住民の為の生活用品を購入してくるのだった。

住民達は、一日を各々の好きな事をして過ごしている。

セルジュもそれに従って、自分の鏡の部屋の中に引き籠もって、ずっと思索を続けている。

晚餐の時間になると、メンバーが揃う。

ルブル、メアリー。そして、セルジュ、イゾルダが主に、食卓を取り囲んでいる。

燭台の炎が燃え盛る中、ルブルが何処のものとも思えない、何かの宗教の祈りを述べた後、メアリーの作った食事をみな口にしてい

ルブルは、隣に小さな男の子の人形を置いて、その人形の口に、料理を乗せたスプーンを運んでいく。人形の口元に孔でも開いているのか、料理は少しずつ無くなっていく。

その人形が何者なのか訊ねると、ルブルは悪戯っぽく、実の弟、と答えた。

名前は、クルーエルと言うらしい。

兎にも角にも、この城の住民達の全員が、狂っていた。

人として、間違っていた。

それでも。

そんなこんなで、日々の生活が、倦怠を伴いながら続いていく。

魔女ルブルに、メイドをしているメアリー。

それから、謎の巨漢であるイゾルダという男。

ルブルの弟とかいうクルーエルという謎の人形。

そして、今やダリアの肉体の中に脳移植を使って入り込んだセルジュ。

少なくとも、五名の者達が、この広大な城の中に住んでいる事になる。

他にも、住民がいるらしいのだが、セルジュは詳しくは分からない。

今、セルジュが考える事はと言えば、ダリアの肉体を手にした自分は、一体、何なのか？ というその事ばかりだった。

自分自身の観念の世界の中から、どうしても抜け出せそうにない。

そして、こんな状況を与えてくれたメアリーの方は、そんなセルジュをととても喜ばしく思っているみたいだった。

……………。

少し前の事だった。

セルジュは、晚餐の時、城の主であるルブルから楽しそうな顔で告げられる。

その頃の彼は、この城に来てから、驚く事ばかりに出会っていた。

頭の中を整理するのが大変だった。

そんな彼に対して、ルブルはとても楽しそうな笑みを浮かべていた。

「ねえ、セルジュ。もう、そろそろ、この生活には慣れたかしら？」

「……………分からないな。俺は、その、ダリアの事ばかり考え続けている」

「あらそう。ねえ、貴方はメアリーに気に入られているの。なら、私も貴方を信用するしかない。ねえ、セルジュ。単刀直入に言うと、私達は“世界を破壊する為の組織”を結成しようと考えているの。組織の名前は『ダート』と言う。魔術における、セフィロトの樹木を結ぶ十の円環の裏側にあると言われていて、もう一つの隠された“深淵”だとか、“知識”だとかを意味する円の事だとか、あるいは“汚さ”を意味する言葉だとか。色々と、名前の下地となったものはあるけれども、ダートはそれ自体を意味にしたい。このダートというのは、私達の組織の名前、という意味。貴方も、そんな理想の虜になればいい。ねえ、私達みんなで、この世界を破壊しましょう？ それはきっと、とっても素敵な事なのだから」

そして、ルブルは、メアリーを呼ぶ。

そして、彼女は指を弾いて、何かの合図をした。

メアリーの右手の指先から、ゆらゆらと炎が生まれて、それがこの空間一帯を回転していく。炎は床のカーペットを走るが、カーペットは燃えずに、焦げずに、炎が床を走り続けていた。

「私達は、これらの力を、“能力”と呼んでいる。魔法だとか、力だとか、どんな呼び名でもいい。貴方にも、その才能があるのだと見込んで、メアリーは貴方に眼を付けたの。でも、そんな特殊な力の持ち主だけじゃ駄目。私達が欲しいのは、“もっとも邪悪な精神の持ち主”。それを探している。つまり、狂人だとか異常者だとか、そういった概念を与えられる者達を更に超え出た者が人材として欲しいの。おめでとう、セルジュ。貴方は、それに選ばれたっていうわけ」

ルブルの言葉を耳にしながら、メアリーはくすくすと笑っていた。

「はあ……………？」

何が何だか、分からなかった。

けれども、何故だか、ルブルの言葉や目的は、心地の良いもののように思えた。

どうしようもない程に、魅惑的なもののように思えた。

「忌み数として、ちょうどメンバーは“十三名”集めたい。とにかく、破壊的で狂気の先へと向かっていった者達がいいわ」

ルブルは、悦に入りながら、そんな事を話し続けていた。

セルジュは、此処が居場所なんだと思った。

ずっと、彼には居場所らしい居場所なんて、存在しなかったからだ。

集めたいもの。

それは。

邪悪なる精神。

そんな言葉に、どうしようもない程に、惹かれていった。

けれども、だからといって、自らが積極的に行動するのは、とてつもない程の倦怠を伴ってしまう。

彼は、ルブルから与えられた『鏡の間』という部屋に、ひきこもり続けていた。

元々は、普通の部屋だったのだが、メアリーに頼んで、部屋の四方に張り付ける鏡を買ってき

て貰ったのだった。

そして、彼は、自らの自我の密室の中に、ずっと閉じ籠っていた。

だから、ルブルやメアリーが、ダートを結成した後、人間世界の侵略を始めようと言っている中、なおも、彼は夢現の世界の中で生きていた。

ずっと、考える事と言えば、ダリアの事ばかりだった。

それだけが、彼にとっての世界の全てだった。

十

イゾルダとは妙に気があった。

彼は畑で、植物を植えていた。

彼の植える植物は、軟体動物のような部品を有していた。

「俺の力の名前は『イーティング・スター』という。俺はこの星を食い潰したい。人という生命に復讐する為にな」

そう言いながら、彼は彼が育ててある植物に、水や餌として使っている魚などを与えたりしていた。

「なあ、イゾルダ。お前って人とかって作れるの？」

「人は嫌いだ」

「マンドラゴラってあるだろ。あれは、人の形を模している草だよな。あれって魔術とかに使う薬草らしいんだけど、引き抜いた奴は死ぬんだっけ。何でなんだろう。やっぱさあ、恨みとか苦痛が強いからなのかな。呪詛だけで、人を殺せるのかな」

「俺は人型の植物は作らん」

「そうかよ」

そう言いながら、イゾルダは、透明な翼の生えたネズミを、セルジュに渡した。

セルジュは思わず喜ぶ。

可愛いなあ、とってしまったからだ。

「なあ、イゾルダ。俺は思うんだけど、お前は征服がしたいんだろう？　じゃあ、乗り物作らないか？　ヘリコプターがいい。プロペラが大きな奴が俺は好きだな。なあ、人間の歴史って奴は、最初、馬やラクダから始まって。馬車とか機関車とか船とか、飛行機とか作るだろ。そして、戦車だとか、軍艦だとかさ。それって、征服の歴史っても言い換えられるんじゃないのかって俺は思ったりするんだ。だから、お前さ、征服がしたければ、乗り物作ってくれよ」

「成る程。……………考えておく」

イゾルダは自らが作ったネズミを丁寧に撫でていた。

畑では、メアリーもハーブなどの植物に水をやっていた。

果物や野菜も植えてある。気候には関係の無いものばかりだった。それらは、土壌に埋まった死体を養分にして育てているのだ。

セルジュは感覚が麻痺してしまっているが、やはり、きっとおぞましい事をしているんだろう

なあ、とは思ったのだった。

ただ、此処はとてつもなく居心地が良い。

みんな一人、一人の世界観のようなものを持っていて、自分の中にある醜悪な部分も、此処では至極、普通なのだ。

だからこそ、居心地が良いのだろう。

居場所というものを、初めて見つけたような気がする。

それくらいに、自分はずっと孤独だったのだろうから。

十

コード203。

座標軸は75鋭角度。

目標は、67トロン先。

隣にいる、ルソッドは意味不明な暗号文を垂れ流し続ける男を見ながら、一体、彼が何をやっているのかという事に対して疑問に思ったのだが。余り、細かく考える事は無かった。どうやら、頭の中で、彼独自の式を組み立てているみたいだった。意味不明な言語を、彼は呟き続ける。

ルソッドにとっては、この男が、何をしようが、関係が無かった。

とにかく、目標を始末出来れば、それで良かった。

ルソッドは、『ドーン』のサイトをアクセスして印刷した文章をまじまじと眺めていた。

自分には、Cのクリミナル・ランクが付けられており、642万もの賞金が付けられている。後ろの全身を装甲で覆った半分、機械の男は、Bランクの一下くらいの強さで、確か、1023万くらいの賞金が付けられていた筈だ。

ルソッドは、ドーンというシステムを憎んでいた。

そして、自分を付け狙うハンター達を呪っていた。

ルソッドは、口元から、ぐっぐっ、と、溶解液を吐き続ける。

これは、数種類の毒素を混合させて作ったものだ。

今、彼は狙われているのだ。

どうにも、正体不明の能力を使ってくるのだが、有名なハンターらしい。

『インソムニア』という能力者だ。

そいつは、女の能力者だ。一般的に、女は非力な存在なのだが、女の姿をしている能力者に限っては、性質の悪いのが多い。それが、この異質な力を有する者達の間での、一般常識みたいなものだった。

そのインソムニアという女は、何名もの、賞金首を殺して、味方になる者を何名も死へと追いやっているとされている。通称、死神と呼ばれている。その名前が意味するのは、実際に、それ以外の名称は在り得ない、とされるような存在だからだと聞く。

夜の路地だ。

工場跡地が続いている。廃墟だ。

二人は、この辺りをねぐらにしていた。

相棒の名前は、コンドル・フードとかいう名前らしいのだが、本名なのか、コード・ネームなのか何なのか分からない。とにかく、改造人間である事には変わりは無かった。

彼とは、つい三日前に出会って、味方になって貰ったばかりだ。

ルソッドは、インソムニアから追われていた。

そいつは、両手を掲げて、真っ黒なエネルギーを放ってくる。彼女は、べらべらと、力の概要を話していたのだが、どうやら人間は感情というものを、周辺に撒き散らして生きている存在らしい。彼女は、怒りや悲しみや苦痛などの、ネガティブな感情を拾い集める事が出来るらしい。そして、それを弾丸のようにして、放り投げる事が出来るのだと。

ルソッドは、苛々しながら、腰元に抱えた振動ナイフを手にしていった。

昔、企業の暗殺者をやっていた頃の名残だ。これで、雇われ主と敵対する何名もの重役などを死へと追いやっていった。

振動ナイフを喰らえば、切り付けた箇所が、粉微塵に砕け散っていく。

それと、ルソッドは、更に毒液を飛ばす事によって相手を死へと追いやる事が可能だ。

インソムニアという能力者が、どれ程、強かったとしても、彼はそれ程、怖いとは思わなかった。

工場跡地の中には、錆びたクレーンや、タンク、消火器やトラックなどが置かれていた。ボンベやスパナの残骸なども置かれている。

隠れる場所は、幾つもあった。

インソムニアからは、数日前から追われている。

仲間になってくれた、コンドル・フードに動きを封じさせてから、彼自身が止めを入れる算段でいた。

工場内へと、一人の人影が、ゆらりと入り込んでくる。

その女は、まだ十代くらいの少女で、黒を基調にした、パンキッシュな服装をしていた。右耳の幾つものピアスをごりごりっ、と弄りながら、耳に出来た瘡蓋を指で弾いていた。

「つまんねーから、出てこいよ。楽しい、殺し合いをするんだろう？」

女は、首をこきり、こきりと鳴らしていた。

座標軸、コード、そんな単語をルソッドの隣の男は、ひたすらに口で唱和していく。完全に壊れた機械だ。

そして、彼は全身が発光したかと思うと、肉体が変形していった、銃口が次々と飛び出していく。

その銃口は、次々と、工場内へと入ってきた少女を蜂の巣へとしていく。

硝煙が上がっていった。

ルソッドは、冷や汗をかき続けていた。

まるで、効いていない……。

少女は、全身、孔だらけになりながら、肉や骨を削がれながら、内臓を食い出しながらも、立ち上がって、へらへらと笑っていた。

不死身の能力者だ、それがインソムニア。眠りを殺した者だ。
「さてと、今から、お前らには死の舞踏を踊って貰うんだが」
彼女は、いつの間にか、禍々しいデザインの鎌を担いでいた。
そして、つかつかと自分の血や肉を撒き散らしながら、工場の奥深くへと歩いていく。
そして、彼女は仰け反るように、一回転して、すっ転んでいた。
ルソッドは完全に呆けた顔になる。
何と、彼女は、自分自身の垂れ流した血液によって、物の見事に足を滑らせたみたいだった。
少女は頭を抱えながら、ひいひいと呻いていた。どうやら、頭の瘤の方が、全身に受けた骨や内蔵の損傷よりも、辛いみたいだった。

十

城の中では、よくお茶会をしていた。
メアリーは、ベルガモットの紅茶のポットに、バームクーヘンや林檎のケーキなどを用意してくれた。彼女は、この城のメイドなのだ。だから、あらゆる雑事をこなす事が出来た。
セルジュは、食客のようなものだった。
この城の主は、魔女ルブルであり、メイドはメアリーだった。
他の者達は、ある意味言えば、客人のようなものだった。
イゾルダもたまに、料理をするのだが、メアリーが明らかに狼狽しながら止めるように言った。イゾルダの作り出す料理は、明らかに不気味な怪物の肉や繊維などを使っていたからだった。とても普通の人間が食べられそうには思えない。メアリーはそんな事を頻繁に言って、止めていた。
そんな様子を見て、主人であるルブルは、くすくすと笑みを浮かべるだけだった。
そして、ルブルだけは、イゾルダの料理を口に入れていた。味の感想としては、獣の肉なのか、果物を食べているのか、タコやイカを口にしているのか分からない。とにかく、ひたすらに不味い、彼女は大柄の男にそう告げた。
この城は、普通の世界からは、さかしまのように反転していた。
あらゆるものが狂っていて、その狂っている事こそが、とても楽しかった。
セルジュは、自分なんて、小さな狂人でしかないのだろう、と思った。だから、楽だった。これまでの人生から、楽になったように思えた。
自分の人生は、とても小さなものだった。決まりきったルールの中に、ずっと縛られていたような気がする。他の者達もそうであるように、恋愛だとか安定した職に付く事ばかりが、彼らの物語だった。セルジュは内向的で、友人が酷く少なかったが、そのルールを進もうと思った。そして、ひたすらに勉学の世界に没頭していった。コミュニケーション能力など、まともに積み上げる事が出来なかった。結果として、そんなセルジュをダリアは拒んだ。
セルジュは、何かある度に、ダリアの事がちら付いて離れなかった。彼は、それをメアリーに告げた。すると、メアリーは、別にそんなの一向に構わないじゃない？ そう返してくれたのだ

った。



インソムニアは、死と共に生きている。

彼女は、死に憧憬を抱いているからこそ、殺し合いが、とてつもなく大好きだった。
夜道だった。

彼女は、二人の男と戦闘を行っていた。

一人は、ショットガンを操る男、もう一人は全身が水膨れのようにになって毒液を吐き出す男だ

った。

ショットガン使いの男は、次々と弾丸を彼女の肉体へと撃ち込んでいく。

彼はそれで、インソムニアの肺や喉の辺りに、所謂、致命傷というものを負わせる。

しかし、インソムニアは、嘲笑ったかと思うと、何処かから取り出した、大きな鎌で、その男の首を刎ねた。

毒液を吐く男は、危ういと判断して一人、逃れようとするのだが。彼女は、右手をその男へと向ける。すると、彼女の右手から闇色の光が放たれたかと思うと、その男に直撃して、男を粉微塵にしていく。

これにて、今日のハントは終わりだ。

これから、彼らの賞金を貰いに行かなければならない。

彼女は能力者組合である、『ドーン』のハンターをしているのだ。犯罪者達に複数の者達が賞金をかけて、倒した者には賞金が送られる。そういった単純なシステムだ。

命の危険性から副業で行っている者も多いのだが、彼女は違った。

彼女は、骨の髄まで、ドーンのハンターだった。殺す事も、死ぬ事も、夢物語のような未来なんて存在しない事も受け入れていた。だから、毎日、享乐的に生きる事こそが、彼女の楽しみだった。

賞金で、新しい服を買おう。考えているのは、そればかりだ。

インソムニアは、少女の姿をしていた。

全身を、ゴシック・パンクの服で纏っていた。

彼女は右耳に幾つも開いたピアスを弄りながら、ショットガンの男の首をころころと脚でボールのように転がしていた。

ふと、彼女は、背後から何者かが現れたのに気付く。

それは、腰元まで、金色の螺旋を描くような縦ロールに伸ばした漆黒のドレスの女だった。まるで、浮遊するように、女は地面に降り立っていく。

「何の用だ？ メビウス・リング」

インソムニアは、気だるそうに嘲笑った。

「『アサイラム』のケルベロスからの要望なのだが。今、アサイラムには、護衛兵が不足している。一時的にでもいいが、お前に戦力になって貰えないだろうか？」

「ふうん？」

インソムニアは何処か不愉快そうな顔をしていたが、二つ返事で了承する。

十

『アサイラム』というのは、“能力者”の犯罪者達が収容されている施設だ。

能力者は、普通の犯罪者としては扱えない。普通の刑務所には入れられない。だから、殺害して始末するのが、此れまでの対処法だった。

しかし、アンブロシー、チェラブ、ハーデスという三名の男が、能力者収容施設としての刑務

所である『アサイラム』というものを作った。

そこは、世界の果ての孤島に作られており、辺り一面は、気象が荒く、途中の大きな滝壺によって一帯が覆われている場所だった。

アサイラムは、ベーシック・インカムが成立されており、囚人達には、可能な限り、最大限の自由と人権が保障されていた。

食事、恋愛、読書、収集、衣服、スポーツ、その他の、ありとあらゆる娯楽が、アサイラム内では与えられていた。

だからこそ、大半の者達は、強大な力を持っていても、従順だった。一応、頭蓋の辺りに、能力をコントロールする装置が埋め込まれていたのだが、それは余り関係が無いだろうと言っていた。そして、彼らは、彼らの力を使って、人類の未来に貢献して貰う。実際、大気汚染の浄化、電腦システムの拡大、都市建設、自然の繁栄、食糧難の解決、ありとあらゆるアイデアを使って、能力者達は、人類の未来に貢献し続けている。

ケルベロスは、彼らを人類の遺産だと思っている。悪を通ったものしか、善なるものを理解出来ないとも考えている。

ただ、極稀に、アサイラムの秩序を破壊したがる囚人達も存在した。

.....

ケルベロスは、マルボロに火を点けながら、回想から戻る。

師であるハーデスは死に、所長は行方不明。そして、副所長であるチェラブは、ある男によって殺された。

彼は、今や、臨時的に所長という役職に付いている。

荷はとてつもなく重い。

けれども、やりがいはあった。

守るべきもの、大切にすべきもの、それらの信条と共に生きる事が出来たからだ。

.....

二日程、前の事だった。

彼宛に、ネット回線を通じて、電報があった。

情報元は不明だ。

あるいは、ネットを媒体にした、何かの力なのかもしれない。

電報の内容は、単純だった。

《アサイラムを来る日に、我々で襲撃する。》

ダート、という文字が下にはあった。

人名なのだろうか。あるいは、組織の名前なのだろうか？

よく分からない。

ただ、何となく、此処を破壊したがる人種が何なのかは特定が出来た。

それは、“秩序を破壊したがる者”だ。

このアサイラムという機関は、ドーンのハントに対する回答の一つでもある。

能力者は逆に言えば、不当なまでに差別される傾向もある。

だから、犯罪者にならざるを得ないという実態もある。

どうにかして、それに終止符を打ちたい。

それこそが、アサイラムが作られた所以なのだとも聞かされている。

十

城の住民は、色々だ。

色々な者達が、この迷宮のような城の中に住んでいる。

未だ、この城の全貌は分からなかった。

メアリーから、合鍵を渡されて、セルジュは、その赤い部屋の中へと入った。

そこには、両手と両足の無い、赤黒い髪の女が、ソファに横になっていた。

その女は、酷くどろりとした眼をしていた。

どうしようもないくらいに、虚無的な印象を与えてきた。

彼女は、時折、怒りに打ち震える。

ぼそぼそっ、と、生きている事が苦痛で、屈辱で仕方が無い、と、そんな事ばかりを述べる。

彼女の名前は、アイーシャと言うらしい。

何でも、セルジュがダートに入る前に、魔女を討伐する為の騎士団というものがあり、彼女は騎士団長の一人として、メアリーに挑んだのだが、返り討ちにされて、此処の城の住民にされてしまったらしい。

メアリーに四肢を切り落とされて、更に、処女だったアイーシャは、ルブルが死体から作った男性器をメアリーが下半身にはめて、彼女は酷く犯されたらしい。

異常なまでの性倒錯をメアリーは持っていた。

セルジュはそんな話を聞いて、自分の醜悪な感情なんて、とても可愛いもんじゃないのかと思いを込めてしまった。

アイーシャは、屈辱と憎悪によって、彼女に屈服したのだ。

心の中まで、凌辱されているのだろう。

彼女は、ずっと悪夢の中から抜け出せずにいるみたいだった。

ずっと、ずっと、彼女は自分自身の自我の迷路を彷徨い続けていくのだろう。

切り落とされた手足は、ルブルのゾンビ兵に与えられたらしい。そのゾンビ兵は、武器を手にして、強力な力で、ルブルの城の周辺を守っているとの事だった。

アイーシャのような存在からしてみると、きっと、セルジュは何処までも、何処までも、汚らわしくて気持ちの悪い存在なのだろう。それだけはどうしようもないくらいに理解出来るし、認めるしかないのだ。

十

ダリアは、希望の象徴だった。

セルジュは、この城の中に来てから、ずっとダリアの事ばかりを考えていた。

彼女が、彼に話しかけたからいけなかった。

セルジュは、暗く自閉的だった。

どうしようもない程に、他者というものが恐ろしかった。

ダリアは、彼にとって、妬みの対象でしかなかった。あるいは、憎悪の対象でしかなかった。彼女を見る度に、自分の中の自尊心が傷付けられ、抉られていくような気分になってしまっていた。

だから、ずっと屈辱的だった。

自分が陰ならば、彼女は陽だった。

どうしようもないくらいの劣等感ばかりが募っていた。

彼女は、色々な男達に優しくしたし、同性の友達も多かった。眉目秀丽で、なおかつ、勉強も、セルジュよりも出来た。きっと、彼女は将来、幸せが約束されているのだろうと思った。どうしようもないばかりの絶望が、セルジュの心を蝕んでいった。

好意がある事を宣言してしまったのは何故なのだろう？

彼女を本気で、自分の所有物にしたいと強く願った。

そして、彼女に嫌われた後、彼女の何もかもを破壊してしまいたいと思った。

セルジュは、卑小なだけの自分に気が付いたのだった。

彼はエリートの道を歩いていた。

将来はそれなりの地位に付ける筈だった。

けれども、蓋を開けてしまえば、とてつもなく卑しく、弱い心の持ち主でしかなかった。下らない人間でしかなかったのだ。

自分は、未だ夢の世界の中で生きているように思えてしまう。現実という実感を、いつまでもいつまでも獲得出来ずにいるのだろう。

だから、ダリアの事を永遠に理解する事なんて叶わないのだ。

もはや、彼女の精神というのは虚空の彼方へと消失してしまったのだ。

だから、決して自分は彼女にはなれない。

たとえ、彼女の肉体をこの手に入れたとしてもだ。

鏡の中には、ダリアが映っているのだが、結局の処は、自分自身が映っている。鏡という存在は不思議なもので、その向こう側に別の世界が開かれているようにも思えてきてしまう。そして、向こう側から語りかけてくるかのようだった。

お前は、何で、生きているのだ？ と。

声が、何度も、残響しながら語り掛けてくるように思えてくる。

それは罪悪感なのか、何なのかまるで分からない。

ただ、とてつもない恐怖だとか、不安だとか、そういったものである事は確かだった。自分という存在を、どうしても引き剥がせそうにない。

そうする事でしか、自己を保つ事は出来ないから。

四六時中、魘される悪夢の続きをまだ見ていたい。

スクリーンは、何処までも何処までも素晴らしくて、とてつもない程に楽な気分させてくれるのだから。

間違いなく言えるのは、この密室から出たくはない。

それだけは、強い望みだ。

ベルガモットのアロマを焚いて、気分を落ち着かせる。

そして、好きな菓子類などを皿の上に置いては、ずっと倦怠な時間を過ごしている。

鏡の中の自分は、いつだって好きだった女の顔だ。

独占出来なくて、精神を支配出来なかった女の顔だ。

まるで、呪いのように、鏡の向こう側から囁き掛けてくるみたいだった。

セルジュは、きっと呪われているのだろう。

死ねば、地獄へと突き落とされていくのかもしれない。しかし、そんなもの、どうだっていい。ただ強く、この倦怠の中で生きていたい。

此処は、トーマス・マンの『魔の山』の世界みたいなものだ。

病人は外に出ずに、自我の密室の中に籠っていればいい。

それだけでいいのだと、彼は思うのだ。

十

アイーシャは、いつの間にか、金属の手足を身に付けていた。

失われた手足は、どうしたのだろう、とセルジュは思っていた。

彼女は空ろな眼で辺りを見回していた。

「殺してやる、殺してやる、殺してやる……………」

部屋の隅には、メアリーのバラバラ死体が転がっていた。

セルジュは、頭がおかしくなりそうになる。

「何度、殺しても、この女は生き返る……」

ざしゅっ、ざしゅっ、と、彼女は、メアリーの死体を剣で切り続け、頭蓋を砕き、手足を事細かく切り刻んでいく。

「四日目だ。四日、殺しても、翌日には生き返る」

アイーシャは血走った眼で、メアリーを刃物で刻み続けていた。

もはや、彼女の眼は、狂気ばかりが灯っているかのように見えた。

「何故、死なないのかしら？ ふざけやがって、ふざけやがって、……………」

何度も、何度も、刃物を突き立てる音が響いていく。

セルジュは、この部屋を出ようと思った。

何だか、酷く不気味で、やるせないような気分になったからだった。

アイーシャの叫び声が聞こえてくる。

殺してやる、殺してやる、殺してやる、殺してやる。

そう彼女は呟き続ける。

そう、アイーシャの精神はメアリーによって、支配されているのだろう。

彼女は、もしかすると、何も見えていないのかもしれない。

ひたすらに、精神の幻影を追いかけ続けているのかもしれない。

メアリーは、どうしようもないくらいに、マゾヒストでサディストなのだと、本人から聞いた事がある。だから、メアリーにとっては、アイーシャはとてつもなく素敵で愛しい存在なのだろう。

セルジュは扉を出る。

すると、遠くから、メアリーの声が聞こえた。

どうやら、晚餐の時間らしかった。

十

イゾルダは中庭の畑にいた。

セルジュは、呆けた顔で、それを見ていた。

彼は、エイのような乗り物を作り上げていた。

よく見ると、ヒレは翼のようになっており、皮膚や筋肉にあたる部分は、植物の蔓で出来たエイだった。

「セルジュ、乗り物を作ったぞ。何度か失敗したが、そうだな。D-2026、とでも名付けている」

セルジュは、ははっ、と乾いた笑いを浮かべていた。

番号表記は、それだけ、彼が失敗作を重ねてきたからだろう。

セルジュは、何かちゃんとした名前を付けられないのかよ？ と訊ねると、イゾルダは、頭を捻りながら、悩んでいた。どうも、ネーミングという概念を創作物に付けるという発想は余り無いらしい。

そう、もうじき、侵略が始まるのだ。

セルジュは、いつまでも、いつまでも自分の世界の中に閉じ籠っていたかった。

ダリアとずっと、対話していたかった。

けれども、もうじき、戦いが始まる。

セルジュは、自分が役に立つのだとは、とても思えない。

自分の存在価値など、メアリーが歪んだ思想で肯定しているだけに過ぎないのだ。

セルジュは、自分は矮小で卑小で、どうしようもない人間なのだと思っている。

しかし。

しかし、メアリーやイゾルダと一緒にいると、何故だか、自らも強くなれたような気になっている。

どうしようもない程に、彼らといると安心感と、小さな万能感が芽生えてくる。何故、こんなにも、仲間と呼べる者達に囲まれているような気分になるのだろう。

それはとても、不思議な感情だった。

どうしようもないくらいに、大切なものだった。

十

「グリーン・ドレス」

魔法の城のメイドは、その女の名前を呼ぶ。

そこは、森の中だった。

彼女は、川から流れ着いてきたのだった。

戦いの負傷なのだという。

随分、傷を負っていた。瀕死の状態であったと言ってもいい。

何があったのかは、深く聞かなかった。おそらくは、少し前に、大きな死闘を行ったのだろう。もっとも、彼女の好戦的な性格から考えて、いつもの事だったのかもしれない。

ダートを作る以前に、彼女とは会った。メアリーが、彼女の負傷を治療した。

彼女は、ドーンのランキングに入っている。高いランクの能力者だ。

だからこそ、色々あったのだろう。事情は聞かない事にした。

「ねえ、メアリー。私は楽しみたいだけなの。だから、私は私の好きなようにさせて貰うわよ？ それでも一向に構わないのよね？」

「ええ、いいわ。緑の悪魔。存分に暴れて欲しい。それこそが、貴方がダートに席を置く意味になるのだから」

「指図も何もかも受け付けない、私は自由で。自由の赴くままに、破壊と殺戮と、欲望を楽しむだけなのだから」

くっくっ、と、グリーン・ドレスは笑い続ける。

彼女は、民族衣装めいた服装に、牙のようなものを幾つも通した首飾りを付けている。

周囲の温度が、徐々に上昇していく。

彼女は、炎を扱う能力者なのだ。

だから、彼女は炎を使う事によって自らの欲望を満たしたいと考えているのだろう。

十

マディスはアサイラムに収容されている囚人の一人だ。

彼は、ケルベロスから体術などを教えて貰っている。

マディスは、此処に入るまでは、ただのクズだった。

人の痛みなんてものは、毛程も感じないものだった。

彼は、他人を傷付ける事でしか、快樂というものを感じる事が出来なかった。

しかし、此処に来てから、何かが変わったような気がする。

朝食は、サラダやジャム塗りのトースト。

昼食は、適度な量の麦飯や魚。

夜食は、小さなステーキとポテト。それから、少々のワインを飲んでいる。

外の世界にいた頃は、ジャンク・フード三昧の日々だった。あるいは、路上の残飯を漁った事もある。他人から脅して巻き上げた金で、高級料理を口にした事もある。随分と好き勝手に生きてきた気がしたのだが、それでもどうしようもない程に満たされていなかった。

そして、ある時、彼はケルベロスと出会った。

まだ、ケルベロスが、此処の所長では無かった頃だと思う。

ケルベロスは圧倒的なまでに強かった。

マディスは、肉体を強化する事が可能だ。

そして、強化した肉体によって、コンクリートなどを簡単にぶち破る事が出来る。そして、あらゆるものを硬質化させる事によって、拳銃やナイフの威力なども挙げて、材木を鉄骨などの硬さの凶器にまでする事が出来た。

ケルベロスは圧倒的な力で、マディスの攻撃を破っていった。

まず、彼には拳銃が命中しなかった。

肉体に刃物が通らなかった。

そして、気付くと、マディスは投げ技だけで彼に倒されてしまっていた。

アサイラムは自由を与えてくれる。

何故、自分のような存在が、こんなにも幸福を与えられるのか分からなかった。

ケルベロスに訊ねると、誰だって幸せになる義務と権利があるんだ、と、それだけを返された

。

以来、マディスはケルベロスの為になれば、命を張ろうと思った。

自分はきっと、弱いのかも知れない。

けれども、精神的には、とてつもなく強くなろうと……。

十

アサイラム周辺はリゾート地みたいなものだ。

椰子の樹木が生い茂り、潮風が吹いてくる。

ケルベロスが散歩をしていると、樹木の影から一人の男が現れる。

黒髪を伸ばした男だった。

彼の名は、レウケーと言う。

全身を、穴の開いたTシャツを身に付け、ダメージ・ジーンズを穿いている男だ。

「ケルベロス、ダートってのは何だろうな」

彼はおもむろに呟く。

ケルベロスは、携帯灰皿を取り出して、吸っていた煙草を消す。

「さあな。しかし、俺は思うに、愉快犯の可能性が高いと踏んでいる。まるで分からないのだが、ダートの目的はどうやら、“可能な限り、邪悪な精神を集める”という事らしい。どういう事なのだろうな。思想的なものの下、人を集めるのだろうか？ 俺には分からないが……」

「俺は殺すぞ？ みな、殺害する。俺の剣技と、『グラウンド・ゼロ』でな。俺はお前やハーデスの気持ち分からない。悪人は死ぬべきだ、と俺は考えている。それが正しいんじゃないかとな。なあ、ケルベロス。お前はいつか足元を掬われるんじゃないのか？」

レウケーは、からかうように言った。

ケルベロスは、首を横に振る。

「それでも……、それでも、俺は人というものを信じたいと思っているらしい。それこそが、俺が生きてきた信念という名前の道標なのだから」

レウケーは、樹木に持たれながら空を仰いでいた。

「もうじき、戦争が始まる気がするなあ。それは、とても大きな花火なのかもしれない。なあ、地獄の番犬。俺は俺で、好きにやらせて貰うぞ？」

「そうかよ。じゃあ、好きにするといいさ」

二人は、いつも意見が合わなかった。

どうしようもないくらいに合わなかった。

そう言えば、と、ケルベロスは思い出す。

ふと、あの男の顔がちら付いていく。

暴君、と呼ばれていた男だ。

彼は死んだのだと、聞いているのだが。……………。

十

グリーン・ドレスは、彼女を狙うハンターと戦っていた。

彼女は、周りを省みない。

彼女の能力が通過した場所は、次々と、塵や灰へと変わっていた。

建造物が、幾つも全焼し、炭化していった人々の屍が散乱していた。

グリーン・ドレスは、空を浮遊しながら、自分を追っている敵を弄ぶように戦っていた。最初、襲撃してきたのは、手に手に刃物を持った何体ものヌイグルミだった。彼女は、片っ端から、それらを手にした凶器ごと焼き焦がしていく。

その次は、全身から刃物が生えた、マネキン人形の群れだった。

どうやら、この敵は、物量で相手押し潰す戦略を取っているみたいだった。

そういった攻撃は、彼女にとっては、逆効果だった。

何故ならば、彼女がもっとも得意とする戦い方は、殲滅戦だったからだ。

敵は、何でも、パペット・マスターと名乗る能力者らしい。

そいつは、不気味な仮面を身に付けていた。

どうも、複数の人形を操るみたいだった。

彼の隣には、イロードという腐臭ガスを放つ男がいた。

グリーン・ドレスは、緑の悪魔という別名がある。

彼女は、辺り一帯に、緑色のガスを撒き散らしていった。

パペット・マスターは、様々な人形を使って、彼女へと襲い掛かる。それは、マネキンだったり、日本人形だったり、球体関節人形だったり、セルロイドの人形だったりした。

緑の悪魔は、一気に、自身の能力を発動させる。

すると、周囲一帯が、爆破炎上していく。

「弱い、とてつもなく、弱いわよ、あなた達っ」

仮面が剥がれて、パペット・マスターは、黒焦げの顔を晒す。完全なまでに、絶命していた。

ぱきりっ、と、グリーン・ドレスは散らばっている人形の腕を踏み砕く。

残ったイロードという男が、必死で命乞いをしていた。

「調べただけけれども、あなた達、ドーンのハンターなのよねえ？ そっちの仮面の男、私が美男子にしてやった奴、ダートとかいうものを調べているんでしょう？ ねえ、あなた、何処から焼かれないのかしら？ 何処が、とっても気持ちよくなれるの？」

グリーン・ドレスの全身が、灼熱を帯び始めていた。

イロードは、必死で頭を地面にこすり続ける。

そして、アサイラムの居場所を吐く、と叫び続けるのだった。

セルジュは、自身の中に生まれた力をひとまず『映し鏡』と名付けた。
彼は、ルブルから借りた、動く死体を取り出して、鏡の前へと置く。
そして、死体が映っている鏡を叩き割る。
すると、鏡が割れた通りに死体が砕け散っていく。
自分自身には、どうやら効果が無いみたいだった。
メアリーいわく、かなり強力な能力らしいのだが、問題はどうやって、相手を鏡に映し出して、更に鏡を割るか、だった。
頭がキレたり、素早い能力者ならば、そんな悠長な戦いなどしてはくれないんじゃないのか。
それが、メアリーからのセルジュに対するアドバイスだった。
鏡をずっと見続けていて、ダリアの幻影を破壊したい。
そんな事ばかりを考えると、こんな力が身に付いたのかもしれない。
能力とは、一体、何なのだろうか。彼には分からない。
あるいは、自分自身が欲している大きな何かなのかもしれない。
しかし、彼はこの閉ざされた部屋を抜け出す事を欲していない。
あるいは、だからこそ、彼は戦いを望んでいるのだろうから。
ずっと、ずっと、鏡の中のような、観念の中の世界に閉じ籠っていたい。
そればかりが、彼にとっての真実なのだから。

十

アイーシャは、ルブル達の目的なんか分からない。
ひたすらに、自分自身に降り掛かる悪夢と戦っていた。
毎朝、メアリーが彼女の部屋の中へと入ってくる。
朝食は仕方無く貰うのだが、その後で、彼女はメアリーを捕まえて、剣やナイフなどで、全身を切り刻んでいく。
自らの心が、果ての無い、激しい憎しみによって蝕まれていく事を理解していく。それでも、彼女はメアリーの心臓にナイフを突き立てて、首を切断していく。
ごろりっ、と、彼女の首が地面に転がっていく。
そして、次の朝になると、またメアリーが朝食を運んでくる。
殺した筈の女が、当たり前のように微笑を浮かべながら、部屋の中へと入ってくるのだ。まるで、自分の精神が断裂を引き起こしてしまったんじゃないのかと思ってしまう。
メアリーは殺しても、生き返る。
その繰り返しばかりだった。
何が起きているのか分からない。
とにかく、自分が狂っているとしか思えない。

最初、四肢が無いままに、メアリーにはいいようにされていた。

憎しみと絶望と、無力感ばかりが、膨大な海のように自分の中に蔓延していくのが分かった。
あるいは、メアリーは憎悪を世界に撒いていきたいのだと言う。

ダートの戦いとは、彼女にとって、そういうものなのだろう。

可能な限り、世界中の者達に憎悪を撒いていく為の、メアリーの望みそのものなのだ。

アイーシャは、彼女の憎しみの虜にされてしまっているだろう。

毎晩、彼女は解体されていくメアリーの肉体を、可能な限り、細切れにしていく。血の臭いも、確かにある。手触りも問題じゃない。

なら、自分は完全なまでに狂っているのだろう。

殺しても、生き返ってくる女。

彼女は、ただのゾンビなのだろうか。

なら、細切れにした死体は一体、何なのだろうか。

自分は、一体、何を見ていて、何処にいるのだろうか。

アイーシャは崩壊感を抱えながら、生きていた。

どうしようもないような、憎悪が膨れ上がっては消えていく。

きっと、それこそが、メアリーの目的なのだろう。

メアリーは、憎悪をこの世界全体に撒き散らしたがつている。

それこそが、彼女の唯一無二の目的なのだろうから。

彼女を蝕んでいるのは、メアリーなのか、それとも自分自身なのか、もはや何も分からない。

十

「アイーシャは、城の中で待機ね。ふふっ、私の作り出した天界へと続いていく、雲の中を彷徨っているのしょうね。ねえ、ルブル。そろそろ、時間じゃないかしら。イゾルダは、すでに準備を終えている。緑の悪魔は、もう飛んでいってしまった」

メアリーは、静かに大きな鉈を研いでいた。

鉈は何も無い暗闇から浮かび上がり、瞬時に消え失せていく。

それが、彼女の力である『マルトリート』という能力だった。

ルブルは死体を好きなようにデザイン出来る。

ルブルの力の名は、『カラプト』と言う。

二人は、ドーンへと戦いを挑もうと考えていた。

二人がいる場所は、塔の上だった。

空には、満月が浮かんでいる。

とてつもない静謐に包まれた、美しい夜だった。

塔の上には、ルブルが用意した二人乗りの乗り物が置かれていた。

それは、皮膚も肉も内臓も無い、翼を持った白骨の竜だった。

ルブルが最初にその怪物に跨る。

続いて、メアリーも、その怪物の上に乗る。
これから、アサイラムを襲撃しよう。
とてつもない高揚感が、二人を支配していた。

十

彼女は、炎の翼を広げながら、一人の男の胸倉を掴んで、大海原を渡っていた。
緑の悪魔は、イロードという男をひきずりながら、この地へと訪れた。
そこは、アサイラムという場所だった。
砂浜によって覆われている。
所々に島がある。
どさっ、と彼女は捕まえてきた男を地面へと投げ捨てる。
イロードは、ハンターの一人だった。
グリーン・ドレスは、彼を捕まえて、この場所へと案内させた。
何名もいたハンターの中の一人が彼だった。
何でも、アサイラムから派遣されてきた者らしい。
グリーン・ドレスは、余りにも簡単に彼の仲間を焼き殺してしまった。
彼女は、イロードを用済みだと判断して、適当に投げ捨てた後、砂浜を徘徊していた。
遠くには、確かに建造物が見える。
取り敢えず、そこに行けばいいのだろうか。
風を切り裂く音が聞こえた。
刀を持った、精悍な顔の男が、彼女を見据えていた。
「あなたはなあに？」
「俺の名前はレウケーだ。『グラウンド・ゼロ』という力を使える」
グリーン・ドレスは、気付くと、一面が小さな山によって囲まれている場所にいる事に気付いた。
爆撃が走っていく。
グリーン・ドレスは、それを受けて笑っていた。
「なあに？ それ」
レウケーは認識する。
どうやら、この女は、レウケーの攻撃を飲み込んだ、という事に。
「私の肉体は、炎を吸収するのよ。覚えておく事ね」
レウケーは、焦りながらも、次の戦略を練る事にした。
この辺り一帯は、岩山に囲まれている。
そこで、岩石を削り取って、彼女にぶち当てる事だった。
レウケーは爆撃を繰り返しながら、砕いた岩の雨を、グリーン・ドレス目掛けて、降り注いでいく。

女は笑っていた。

嘲笑っていた。

全て、背中から拭き出す炎の翼で、弾き飛ばされてしまう。

気付くと、レウケーの前に、女が立って、彼を見下ろしていた。

「弱いよ。自己陶醉野郎。自分が強いと思い込んで、マス搔いているよ。つまらないのよ、弱くて、弱くて、どうしようもないのだから」

ぺちゃっ、と、女は、彼の顔に唾を吐く。

屈辱を感じるよりも先に気付いたのは、吐かれた唾が、レウケーの頬で燃え始めている事だった。

彼は、必死で、それを拭う。

気付くと、女は、翼を広げて、何処かへと向かっていこうとしていた。

緑の悪魔は、何処へと飛び立って行ってしまった。

後には、レウケーが一人、取り残されてしまっていた。

彼は悔しさの余り、地面を何度も、叩き続けていた。

十

ケルベロスは、東棟の辺りを歩いていた。

周囲には、清掃夫の囚人や散歩で何気なく歩いていた囚人達は何名もいた。

確かに、警備機械からの情報によると、何者かが侵入していると聞かされている。ただ、闇雲に行動に移すのはよくない事も分かっていた。

警報機が鳴っている。

何者かが、近付いてきていた。

それは、さながら、飛来する隕石のようだった。

どうしても、人がやってきたとは思えなかった。

隕石のようなものが、次々と、アサイラムの強化ガラスを破っていく。

それは、炎の弾だった。

見事なまでに、鉄甲弾さえ安々と防ぐガラスが割り貫かれていく。

外を見ると、背中から、炎の翼を噴出させた女が浮かんでいた。

「ああああ、ああああ、どうしたのかしら？ ねえ、そこの醜悪な体型の変な動物。私が知る限り、写真で見たのだけれども、あなたって、此処を統治している醜い変な生き物に似ているんだけど、当たっている？」

「ああっ、……俺の事か？」

ケルベロスは、思わず、声が裏返る。

「私の名前はグリーン・ドレス。“瘴気を撒く者”。さてと」

彼女は、赤にオレンジが混ざるロングボブの髪を撫でていく。

「内臓、地面に撒き散らしてやるよ」

そう言いながら、彼女は、強化ガラスを叩き割って、中へと進入する。

「はあーい、足蹴にして踏み付ける価値も無い豚共、お前らは肉料理の材料にする価値も無い。全員、真っ黒なシミへと変わっていけよ」

清掃夫をしていた囚人が、彼女を見つけて走って逃げる。

彼女は、指先から何かを飛ばすと、その囚人の上顎から上は、何処かへと吹っ飛んで消え失せていた。どうやら、壊した強化ガラスを投げ付けた、という事を、周りの者達は理解する。

そして、彼女は、両腕の肘から炎を噴出させながら、ケルベロスへと襲い掛かる。

纏っている羽飾りのようなものが、炎へと形を変えていき。更に、ククリナイフのような鋭さへと変わりながら、彼女が左腕の羽飾りを叩き付けた壁が、鋭利に切り裂かれていく。

ケルベロスは落ち着き払った顔で、身を翻すと。

一瞬にして、距離を縮めて。

グリーン・ドレスの腹の辺りに、掌を撃ちこんでいた。

彼女は、ぐるっ、と一回転しながら、壁に叩き付けられる。

そして、鼻血を拭きながら、こめかみをひく付かせて立ち上がる。

「ああっ？ ふざけやがって、弱い分際で。よくもよくも、この私を。挽肉のバーベキューにしてやるよ。ゲロ臭いタンカスがっ！」

グリーン・ドレスの全身から、ぶすぶすっ、と煙が吹き上がっていく。

ケルベロスの背が押される。

「どいてろっ！」

現れた彼女は、右腕を掲げていた。

「いくぜっ！ 『キルリアン・ストリーム』ッ！」

漆黒に血のような赤の模様を垂らしたTシャツに、同じような柄のアーム・ウォーマーとレッグ・ウォーマーを身に付けて、両耳にナイフや十字架のピアスを大量に付けている少女だった。髪の毛はオレンジ色に、薄いパープルを混ぜている。

その女は、右手の先から、漆黒の光を集めていた。

そして、次の瞬間。

グリーン・ドレスの全身に、インソムニアが放った負の光弾が撃ち込まれていく。

緑の悪魔はそのまま、割った強化ガラスの穴から放出されて、空高く舞い上がって、遠くへと飛ばされていった。

十

メビウス・リングは、アサイラムの中にいた。

彼女は、普段、あらゆる場所を彷徨っている。

ドーンを守るのは、アサイラムを守る行為だけではないからだ。

しかし、今はアサイラムを明確に襲撃する、というメッセージが送られてきている。それは、確かなものなのだろう。

彼女は、アサイラムの施設の中にあるテラスにいた。
此処には庭園があって、囚人達がラグビーやバスケットなどに興じている光景も見える。
そして、青空をひたすら眺めている。
空を見ていると、何かがおかしかった。
それが、光の屈折の仕方だとか、雲の流れだとか。
明らかに、在りえない何かが起こっている。
メビウスは、しばらく様子を見ようと思っていた。
あるいは、此処に近付いてくる者達は、自分をこそ第一の客の一人として、招きたいのかもしれないのだから。

十

ルブルとメアリーは、ルブルが作り出した白骨のドラゴンに跨っていた。
「緑の悪魔が頑張ってくれているのかしら？」
「さあ、どうかしらねえ」
メアリーは、くすくすと笑う。
白骨竜は、かちゃかちゃ、と歯音を鳴らしていた。
メアリーは、幻影によって、別の景色を作成する事によって、周囲の警護兵達の眼を欺いているのだった。
何故、此処に宣戦布告する事を、最初に考えたのか。
それは、此処こそが、秩序の象徴そのものだったからだ。
白骨ドラゴンは、口元からしゅうしゅうと、瘴気を放ち続けていた。
きっと、此処で、祝祭の宣言が行われるのだ。
大きなカーニバルが行われる。
その開幕の宣言をしなければならないのだから。
ルブルは、人と物体の区別が分からない。
メアリーは、憎悪を撒きたがっている。
そうして、邪悪な思想が、世界全体へと溢れ返っていけばいい。

十

「何故、“吸収”出来ない？」
緑の悪魔は、全身に傷を負いながら、立ち上がる。
明らかに、彼女は狼狽を隠せずにいるみたいだった。
「炎でも、風でも無いの？ 何なの？ あの力……………」
彼女は自身の火脹れになったような両手をまじまじと眺めながら、考え込んでいた。
ゆらりと、水面を何かを通り抜けるような音が、大気中でしていた。

緑の悪魔の上部に、大きなエイのような乗り物が現れた。

遅れてやってきたのだろう。

彼女は、不快そうな顔で、それを見ていた。

窓のようなものがあり、中には、二人の人物が乗っているみたいだった。

「よう、グリーン・ドレス。どんな感じだよ？」

メアリーから見繕って貰った、ベージュとグレーのドレスを纏って、セルジュが、緑の悪魔に手を振っていた。御丁寧に、頭半分を覆う、コサージュの付いた帽子まで身に着けている。彼は、少し前までは、男であり、しかも元々は異性装者や性同一性障害の兆候があったわけでもなくて、片思いの女の肉体をぶん取って、好きなように着飾っている男だ。何だか、どう反応すればいいのか分からない複雑な感情が、緑の悪魔の中にはあった。

しかし、すぐにそんな事はどうでもよくなって、先ほどの少女との戦いを思い出す。

まるで、あっけなく撃退されてしまった、という印象を与えてしまっているのだろう。

これでは、自分がただの雑魚のように見られてしまうんじゃないのかと、彼女は、執心を燃やし始めていた。

「ふざけやがって、ふざけやがって、あの連中。全員、燃やして墨にしてやるっ！」

「まあ、待て。緑の悪魔、時間だ」

そう、イズルダは淡々と告げる。

「何？ 私の怒りが収まらない。焼いてやる、凌辱してやる、ふざけやがって、あの女っ！」

ぶすっ、ぶすっ、と、彼女の口から煙が吐き出されていく。

「『渦の牙』という地形が、この辺りであるらしいのだが。そこで、宣戦布告を行う。お前もそこに出席しろ。命令だ。守れ」

緑の悪魔の全身から、炎が噴出しては、消えていく。

「命令？ 私は誰にも指図されない」

「守れよ」

そう言うと、イズルダの右腕がぐにやり、ぐにやりと、変形して、鋭利な刃物のようになる。

「その首、叩き落してやろうか？」

「ああっ、あなたから墨になりたいの？」

セルジュが見かねたように、二人の間に割って入った。

「何だよ、お前ら。何なら、俺がお前ら二人共、倒してやろうか」

そう、必死で意気込む。

それを見て、緑の悪魔は、ぷっ、と腹を抱えて笑い出す。

イズルダが、セルジュを押し退ける。

「とにかく、ルブル達の言っ貰った事は守って貰うからな」

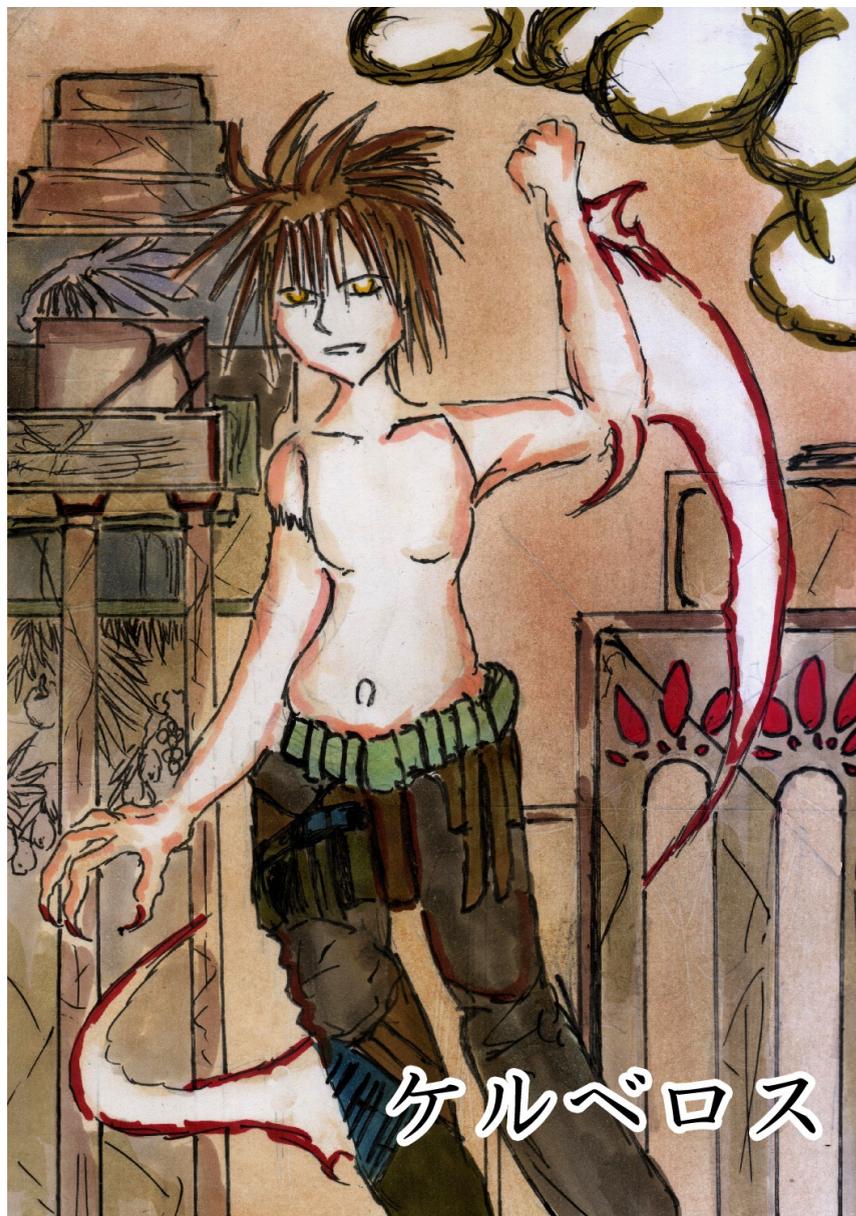
緑の悪魔は、面倒臭そうな顔で、首を縦に振った。

少しだけ遠くの場所に狼煙のようなものが上がっていた。

きっと、ルブルとメアリーが、この地へと降り立ったのだろう。

そこは、アサイラム施設からは多少、離れているが、確かに此処の土地だった。

そこは、まるで獣の牙のような、あるいは何かの武器を螺旋のように捻じ曲げたような、そんな地形をしていた。



ルブルは白骨ドラゴンに乗りながら、その場所に訪れた。

そこは、『渦の牙』と呼ばれる山脈のようなビルの廃墟跡だ。アサイラムの近くにある。

夜空は絶景で星が無く、三日月だけが輝いている。

大きなヘリコプターが『渦の牙』の上にやってきた。

ヘリの中から数名の能力者達が降りてくる。

ルブルはそれを見ながらとても楽しそうに唇を歪めていた。そう、彼らは、有能な、ドーンの能力者達なのだろう。

そう、此処は大きな晴れ舞台なのだ。

空は、暗鬱な黒だった。

真っ黒なドレスを纏った二人の女が対峙していた。

一人は魔女ルブル。

そしてもう一人はドーンを総括する総帥であるメビウス・リングだ。

一人は死体操作人のネクロマンサー。

一人は動く人間大の球体関節人形だ。

どちらも、生者よりも死者の側に近い者だ。

お互いに付き人を何名か連れていた。

「あら、貴方がメビウス・リング？」

魔女は訊ねる。

腰まで捻じ曲がった金色の髪の毛を垂らした女は問うた。

「そういうお前は魔女ルブルか？」

ルブルは首を縦に振る。

夜風が吹き抜けていく。

お互いの背には夜闇から、何名もの付き人達が現われる。

ルブルは傍らにメアリー、セルジュ、イゾルダ、グリーン・ドレスの五名を従えていた。

メビウスは隣に、ケルベロス、インソムニアを従えていた。

「ドーンは“人間の可能性を摘む者達”を始末しなければならない。対象は私の独断なのだが、魔女ルブル。お前は私とケルベロスが直々に、始末する事に決めた。それから、お前の部下も消えて貰う」

「あらそう？」

ルブルは楽しそうに嘲笑っていた。

それは、もう、とてつもなく愉快そうに。

「ドーンとかいう組織の時代はもうおしまい。私は多次元に渡って、勢力を拡大させていくわ。私の右腕のメアリーがもう行動を起こしている。それから、イゾルダ。彼の能力なら、国くらいなら簡単に壊せる。後ねえ？ 貴方達は、とっても不利なのよ」

「ほう、何故だ？」

「たとえば、緑の悪魔、グリーン・ドレスが私達の側に付いた。彼女は、破壊するという事に対して、とてつもなく無慈悲。そして、彼女はとっても強力な能力者。ねえ、メビウス・リング。貴方達、ドーンが狩っている能力者なんて、雑魚ばかりなのよ。自覚はあるのかしら？ 幾つかの小さな世界、幾つかのローカルな場所で、弱い能力者達を統率していても仕方無いんじゃないのかしら？ どうせ、数百年、もって数千年で貴方の支配なんて終わる。理解しているかしら？

貴方は、ドーンは、脆過ぎるのよ。それはもうどうしようもない程にね」

メビウスは、彼女の言っている言葉に不快そうな雰囲気漂わせていた。

きっと、どうやって始末するべきか考えているのだろう。

「お前達、厚正する気は無いか？」

筋骨逞しい男がヘリから現れて、そう言った。ケルベロスだ。

「お前達の力を人々の役に立てたい。そのような喜びを見い出してもいいんじゃないのか？ お前達はきっと、歪んだ人生を歩まざるを得なかったんだろう？」

「ふん」

ルブルの背後から彼女を押しつけるように、一人の女物のコートを纏った女が前に出る。

「私の名前はメアリー」

そう言って、青いコートの女は笑う。

「私は人間がみな、憎しみという快樂の海の中で生きる事を望んでいる。貴方は情報によると、確かアサイラムという場所の所長をしているそうじゃあない？ そこでは能力者の犯罪者を収容して、人類の幸福に貢献させていると。下らないわね、全部、私が叩き潰してやるわ。そいつらの中で見込みがありそうな奴、私達の仲間になってくれるかもしれないし」

ケルベロスは両手を広げる。

「分からんな、何で、お前らはそんなに他人の不幸が好きなんだ？」

「簡単な理由よ」

メアリーは指先を唇に当てる。

「それ自体がどうしようもない快樂を伴うから。支配したい独占したい踏み躪りたい。それはとっても楽しい事なの？ お分かりかしら？」

はっ、と、ケルベロスは鼻で笑う。

「お前らな、やられる連中の気持ちを考えろよ。お前らは自分がやられて嫌な事を他人にやるのかよ」

「面白い事を言うのね？ それこそ、やられるのが自分でなければいい。そしてねえ、私は思うの。やられる方も、とっても気持ちが良いものなのよ、それは甘美な果実みたいなもの。憎しみあって、憎しみが膨れ上がって生きていく。楽しい事でしょう？」

メアリーはくっくっ、と彼を見下すように言った。

更に、メアリーの隣で長い黒髪の女が腹を抱えて笑っていた。

「俺達は、お前らドーンを破壊してやりたいんだ。正義ぶってんじゃあねえよ。俺は特にアサイラムってのが嫌いだ。欲望を押し付けやがるからなあ。そんな施設はいらねえ。全部、ぶっ潰してやるよ。人間の暗黒が蔓延した世界が素晴らしいに決まっている。それがダートの思想なんだ」

メアリーの背後から、全身にローブを纏った長身の男が現われる。

どうやら、彼の身に付けているものは、彼自身の作り出す物によって編んだものだろう。

「俺の名はイゾルダ。俺は可能な限り、世界をお前らの国を、街を、食い潰そうと考えている。人間という種は死滅するべきだ。俺は俺の力によって、全てを原始的な世界に変えようと考えている」

メアリーはルブルの代わりに、みなを代表するように言った。

「というわけで、肉ダルマさん。私達全員は殺戮と破壊を願っている。世界が混沌の坩堝に覆われていく事を願っている。私達は独裁者になる。私達の言葉、理解したかしら？ ああ、それから貴方は私が嫌いなタイプ。私って筋肉嫌いだから」

メアリーの隣にいた黒髪の女は、腹を抱えて大笑いしていた。

セルジュだ。

「そうかよ」

ケルベロスは低い声で言う。

「なら、お前らは強制的に収容してやるよ。どいつもこいつも、頭の中、腐りやがって」

ケルベロスは、本気で憤っているみたいだった。しかし、ルブルは腹を抱えて笑い出す。収容？ 収容程度でいいのか？ と。全員、殺して始末する、という考えが彼の中には無いのだろうか。それ以外の結論しか在り得ない筈なのにだ。

メビウスは何気に右腕を掲げた。

「此処で戦うか？」

ルブルは首を横に振る。

「私はお城で待っていたいの。森の中のお城でね。でも、逆もいいわね。このまま、アサイラムへと、私達が攻め込んでもいいかもしれない。みなを解放して上げるのを夢想するのが、とっても楽しくって」

ケルベロスは自らの顔を抑えていた。

今、アサイラムは、ルブルの作り出した空飛ぶアンデッドや、イゾルダの謎の兵器によって覆われている。それから、グリーン・ドレスも、ここぞとばかりに、施設を焼き尽くそうと狙っているみたいだった。

彼は酷く迷っているようにも思えた。

イゾルダはそんな彼を見ながら、何かを思案しているみたいだった。

「今回は、あくまで宣戦布告という形だ。ゾンビや生体兵器の動きを止めさせようか？」

ぴくり、とケルベロスの眉が動く。

そして、彼は即座にイゾルダの方を向いた。

「止めさせようか？ 少なくとも、俺は今日、お前らと戦う事を望まないからな」

メアリーは少しだけ不機嫌そうな顔をイゾルダに向けた。

イゾルダは面倒臭そうな表情になる。

「今日は宣戦布告にだけ来た。違うか？」

「そうだけれどもねえ？」

メアリーは嬉々とした顔をしていた。

「どの道、多くの者達を苦しめる。出来るだけ多くの者達をね。私達はその為に動いているのよ。違うかしら？」

「しかしな」

イゾルダはフードの中に手を入れて、頭を掻いた。

「あの男、本気で今、俺達全員を倒すつもりでいるみたいぞ？」

そう言って、彼はケルベロスを指差す。

「お前はいいかもしれないが。今、準備が揃っていない。ルブルは丸腰だ。それに、俺も此処では力を発揮し切れるか分からない。セルジュの事も心配だ。どうかな？」

メアリーはそう諭されて、ルブルの方を見る。

そして、思わず自責の念に駆られたみたいだった。

「そうね、ルブルを狙われるのわね、いいわ……………」

メアリーはぼそりぼそりと、ルブルの耳元に囁きかけた。

ルブルは指先を唇に当てる。

メアリーはドーン側の者達に告げた。

「分かったわ。街の破壊は止めさせる。更に此処ではゾンビの生産も行わない。そうね、今日は挨拶をしに来ただけ。また使いの者を寄越すわ、じゃあね、私達は城に戻る。せいぜい、戦闘員を沢山、集めておく事ね」

そうして、宣戦布告の幕は開けた。

ルブルは、更に探し続けるのだと言った。

より、暗く、より黒い精神の持ち主達をだ。

ルブル達は、白骨ドラゴンや生体兵器へと跨り、その場を去っていった。

グリーン・ドレスは、怒りと恥ずかしさの余りか、結局、渦の牙での宣戦布告には参加せずに、何処かへと飛び去って行ってしまった。

そして、悪夢は始まりを告げた。

ルブルは森の城の中にて、あらゆる邪悪な思念を探し続けていた。

十

禍々しい、暗黒の波動によって、彼の感情は、覚醒する。

特別保護房。

そこは、アサイラムの奥底にある場所だ。

部屋は六畳はあり、バストイレが別々に付いている。

本来ならば、囚人には在り得ない待遇。しかし、アサイラムだから許されている。

しかし、この特別保護房というのは、アサイラムの幹部でさえ会議の結果、投げ出した囚人達ばかりなのだ。だから、どう取り扱っていいのか、みな分からずにいるのだろう。

真っ白な部屋で、何もかもが小奇麗だ。

本や雑誌、ゲーム機の類を入れる事も出来るのだが、彼はそういったものを部屋に持ち込まない。それよりも、果てしない空想をしている方が楽しいのだから。

「ふんふん、うふふふっ、ふふふっ、うふふふん、ふん」

ヴェルゼは、その中で、鼻歌を歌っていた。

彼は、とても清らかな気持ちになっていた。

それは、まるで虫や鳥の鳴き声のようにも聴こえる。人の声音とは、とても思えない。

看守達は、彼の存在をととても不気味がっていた。

彼は、一向にお構いなしだった。

彼は、出される食事の他に、スプーンやフォーク、食器なども口にしていた。

ぼりぼりっ、と、色々なものを口に入れては、また酷くお腹が空いていた。

あれは、いつの日だったのか。

xxxx年。xx国。

暴君が滅ぼした国の光景の映像が、ヴェルゼの中で蘇ってくる。

それにしても、空を飛びたいなあ、と彼は思っていた。

天の向こう側には、一体、何があるのだろうか。

そう考えると、とても不思議な気持ちになっていった。

とてつもなく、ふわふわした世界で生きていたい。そればかりが、彼の望みだった。

どうしようもないくらいに、此处は暗くて、自由が無い。

それだけは、実際の出来事なのだから。

十

森の城へと戻ってからだった。

ルブルは、早速、コンタクトを取ってきたものに対して、楽しげに笑う。

「あら、貴方はヴェルゼ。って言うのね？　そこは、位置からして、私達が襲った、アサイラムの中かしら。どうなの？　そこは、ねえ、とっても狭いのね」

ルブルは、自身の城の中へと戻っていた。

ルブルは漆黒の液体が入った大釜を、ひたすらに覗き見していた。

「ふふふっ、お空を飛びたいのかしら？　分かったわ。もうすぐ、自由にさせてあげる。とても楽しい事に参加させてあげる。何故なら、貴方には、その資格があるのでしょうかから」

ルブルは笑う。邪な横顔で笑う。

どうしようもない程に、彼女にとって、この世界は遊技場のようなものでしかなかった。

他人の命を踏み躪る事のみが、彼女にとっての生き甲斐のようなものだった。

彼女は、生命という存在に対して、背徳していた。

そして、そこそが、彼女の存在の意味そのものだった。

ルブルは、生命というものが愚劣で不合理な存在としか思えない。だからこそ、ルブルはルブルの行うべき事を行おうと思っている。

そして、彼女は自分と類する者達にも、自由という解放を与えたいと願っている。

メアリーに、憎しみを撒きたいという、どうしようもない衝動があるように。

誰もが、どうしようもなく逸脱したい何かを持っているのではないのかと。

ルブルは、その後押しをしてあげたい。

それは、彼らに対する贈り物なのだろうと、彼女は考えているのだから。

十

アサイラムとの戦いが始まった後もなお、セルジュは、自分の世界へと閉じ籠っていた。考える事はと言えば、ダリアの事ばかりだ。彼女の顔がちらついて離れない。

同じ大学だったからいけなかった。

たまたま、席が近くて、話しかけてきたのが駄目だった。何故か、こんなにも眩しく映ってしまったのが良くなかったのだろう。最初、親しげに話しかけてきたのが、とても悪かったのだ。きっと、こういう観念は、未来永劫、一生、背負っていくんじゃないかと思ってしまう。いつまでも、いつまでも、殻が閉じた卵のように、セルジュは自らが作り出した観念の世界の中で生きる事になるのだろう。

きっと、それだけは不確定だけれども、確かである、という感覚は伴っている。つまり、セルジュは、何よりも自閉的な自分が好きで、病的なまでに、他者に対する悪意的な感情を持つ自分が好きで仕方が無いのかもしれない。

何度でも、反復して考えてしまう。

ダリアとは、一体、何だったのだろうか。

そう。

彼女は、セルジュにとっての、希望の象徴のようなものだった。

だからこそ、妬みに、憎んだ。

そして、拒まれていった。

彼女をこの手に出来れば、全てが変わると思った。試験に受からない自分、他人と上手く会話が出来ない自分。そんな自分が消えて無くなってしまふんじゃないのかと思った。彼の人生は、ずっとずっと挫折の連続だった。だからこそ、それらのものを乗り越えられるんじゃないのかと妄執的に思い続けていた。

ダリアを自分の所有物にする事によって、ダリアとの恋が成就する事によって、これまでの自分を殺せるのだと思った。乗り越えられるのだと信じた。けれども、抱かれる嫌悪感こそが現実で、永遠にダリアは、自分には靡かないのだと思い知らされて、彼は、非現実や夢想の世界に逃げたいと思った。

夢や空想の世界では、ダリアは自分の物なのだ。

現実に生きる事は、彼にとっては、拷問であり、悪夢でしかなかった。

もし、メアリーが、この城へと導いてくれなかったら。メアリーが異常者で、ルブルの作り出した道具を使って、ダリアの肉体を乗っ取ろうなどという悪辣な提案をしなければ、きっと、自分は、このまま狂いながら、ダリアを刺し殺してしまうか、自ら命を絶つか。生涯、心を閉ざして、惨めにひっそりと、人々の片隅で生きていくだけの存在でしかなかったのだろうと思った。

けれども、今は、違う。

力がある。

認めてくれる、メアリーという存在もいる。

だからこそ、セルジュは彼女に尽くしたい。今度は、メアリーが彼にとっての、光そのものと化してしまっているのだから。……………。

気付けば、いつだって、ルブルの城を取り止めも無く、彷徨ってしまっている。

此処は、思索するには、とても良い場所だからだ。

そこは、大画廊の間だった。

写実画や、印象画、シュルレアリズム絵画や、キュービズム絵画など、節操なく、並べられている。しかし、どれも、これも死体をこねくり回して作り上げたものだ。

そこに、その女は立っていた。

「ねえ、セルジュ、お前はただのクズのゲスだ。それは自覚しておいた方がいいと思うのよね。女の立場から言わせて貰うのだけれども、やっぱりお前のやった事って赦される事なんかじゃあなくて。メアリーの甘言があったとはいえ、お前は願って、ダリアとかいう女の肉体を乗っ取った。そして、お前は望んで、こんな場所にいる。やはり、お前はどうしようもない程に性根の腐った存在以外の何者でもないのよねえ」

「るせえなあ、メアリーのモルモットの玩具の癖に」

アイーシャは、ぎちぎちっ、と、強く歯軋りをする。

しかし、彼女はどうか、心を落ち着かせようと必死で深呼吸を始めていた。

かたかた、と、鎧が動き出す。

「私も、どうか、力を身に付け始めたみたい。ルブルのものと、どうも近いらしいけれども、何なのかな？ これっ」

鎧が動き出す。

鎧は剣を手にする。

そして、ざくり、ざくりと、壁を刻み始めた。

壁は死体で作られているので、必死で抵抗のようなものをするべく、盛り上がり、鎧に反撃しようとする。すると、鎧はぐにやり、と変形したかと思うと。その死体に巻き付いて、死体と一体化していく。

「私も力に目覚めた。ははっ、あはははっ、さてと、ねえ、お前、セルジュ、って言ったかしら？ お前も目覚めているんでしょう？ とっておきに、凶悪なものに」

くっくっ、と、アイーシャは不気味に笑い続けるのだった。

彼女も狂気へと向かっていくのだろうか。

セルジュはそんな事を考える。

いや、みんな狂っている。それだけは間違いない。

あるいはきっと、ルブルとメアリーの目的は、そもそも正気や狂気というものを無くしてしまうおうという考えなのかもしれない。

「じゃあね、セルジュ。私はこの城をしばらくの間、居留守にする。私は戦って、私を取り戻したいのだから。貴方はせいぜい、過去の女の妄想に耽って、一人で自己愛の沼にでも浸かっているといいわ」

そう言って、アイーシャは、ぶんぶん、と剣を振るっていた。

セルジュは、まだ、どうすればいいか分からずに思考の迷路を彷徨うばかりだった。

十

宣戦布告の後、積極的に動いたのは、イゾルダとグリーン・ドレスの二人だった。

イゾルダは、自身の生体兵器を次々とバラ撒いていった。

そして、グリーン・ドレスは、あらゆる国を焼き滅ぼして、勝利の軍旗を国の中央部に突き刺していった。

レウケーと、マディスが二人を追っていた。

しかし、悉く彼らは後手に回って、何も出来ずに煩悶していた。

どうしても、相手の戦力を殺ぐ事が出来ない。

それはとても単純明快な理由だった。

.....強過ぎるのだ。

余りにも、彼らの強さに対して、どう行動すればいいか分からずにいるのだ。

十

「マディス。女、子供というものは守らなければならない存在だな」

ケルベロスは彼に告げる。

マディスは、いつも彼とトレーニングを行っていた。古今東西の武道も教わっていた。しかし、実践では、それ程には役に立たない。何故、そんな事をするのかと、ケルベロスに問うた事がある。

「当然だが、能力者というものは、人間の限界を超える。完全なまでに逸脱していく。奇妙な統計があるのだが、女の能力者や、中性的な容姿の男の能力者に限って、筋骨逞しい身体付きの能力者よりも、異常なまでの力を発する使い手が多いと聞く。これは、ある種、興味深い統計だろうな。完全なまでに逆転しているのかもしれない。獣は武器として、牙や爪、毒などを持ったな。人は自身の弱さを補う為に、武器などを発達させた。主に、狩りは男の役割だった。しかし何なのだろうな、能力者というものは。人の理さえも、超え出ようとする存在なのだろうな」

ケルベロスは、ぷかぷかと、自身の書斎で煙草を吸い続けていた。

マディスは、自身の筋力を増加させるだけの力しか持ち合わせていない。逆に言えば、それ程に彼は弱い能力者でしかないのだ。

しかし、囚人の中でも、特に彼はケルベロスから気に入られていた。

実際、武道などのトレーニングに付き合ってくれるというのも大きいのだろう。

マディスは、その有り余る筋力によって、色々な人間を殴り殺したり、強盗や、強姦なども犯した事がある。それはどうしようもない程に、醜い自分自身から逃れられなかったからだと言える。

だが、アサイラムに入って、とても良かったと思っている。

他人という存在の大切さが分かった。

罪を償う事を証明する事は出来ないが、自分の力によって、建築物の作る為の材木や鉄骨などを人よりも何倍も、軽々と運べる。それはとても良い事だった。

人類の為に、貢献したいとさえ思う。

人類とは、とてつもなく脆いものだ。戦争や天災や飢餓や貧困で、簡単に死んでいってしまう

。この世界は能力者ばかりじゃなく、マトモで普通の人間が大多数の存在として生活しているのだ。

しかし、そんなものを軽々と壊そうとする輩が後を絶たない。

特に、上位ランクの賞金首の能力者が暴れる事によって、簡単に無残な大量殺戮が行われてしまう。人々は能力者の存在を煙たがっている。だから、平凡を生きる者達は、能力者など、みな、隔離か死を望んでいる。

だからこそ、マディスは示したい。

犯罪者である、自分は正しさを伝える事が出来るのだと……。

十

「マディス、俺はケルベロスとは違う」

そう、レウケーは告げた。

そこは、雨の街と呼ばれている場所だった。

聞く所によると、イゾルダは何か思い入れがある場所の一つであるらしい。

イゾルダは、街に入り込んできた二人に、挑発めかした言葉を放っていた。

雨の街は、上部区域と下部区域に分かれていて、年中、雨が降り続けている。そして、住民の大半は下部区域に住んでいる。

此処には、大きな苔生した山があった。

イゾルダは、そこに自身の生体兵器の種を撒いていた。

それは、巨大な無数の首を持った、イソギンチャクの化け物だった。触手の一つ一つの先には、蛇やウツボなどの頭がある為に、神話のヒュドラのようにも見える。

イゾルダは、黒いコートを羽織ながら、二人が山頂付近に訪れるのを待っているみたいだった。

「マディス。俺は性悪説だ。ケルベロスとは相容れない」

彼はそれだけ言って、敵の懐に飛び込もうとしていた。

彼は怪物の付近に近付くと、地面に刀を突き立てていた。

『グラウンド・ゼロ』。

それが、彼の能力だった。辺り一帯に、核エネルギーの攻撃を発生させていく。

森の木々も、岩も、全てを粉々にして、吹き飛ばしていく。

亡きハーデスとは、奇しくも似たような能力だ。ハーデスは、核攻撃を生める能力者であったらしい。自分はそれに追随しているという事になるのだろうか。

しかし、自分はやはり、ハーデスとは立場が違うのだ。その断絶を埋める事など出来はしないのだろう。

レウケーは、ひたすらに、敵を殺して終わらせる事に執心してきた。

結局の処、異常者を矯正する事など出来はしない。

かつて、彼が戦ってきた敵は、みなそうだった。どいつもこいつも、狂っていて、深淵の奥底

を覗き見せられるような敵ばかりだった。

このイゾルダだって、そうだ。

アサイラムに入れる事なんて、出来はしない。

殺して倒すしかない敵でしかないのだ。それだけは、必ず、ケルベロスにも理解して貰う必要がある。

……………彼の能力によって、爆炎が周囲に撒き散っていった。

まるで、爪痕のように、周囲を喰らうかのように、その痕跡は残っている。

イゾルダは、何処へと消え失せていた。

代わりに、彼の残した生体兵器とやらが、破壊された箇所を再生させながら、レウケーとマデイスの目前へと迫っていった。

レウケーに向かって、ナイフのように尖った触手が振り下ろされていく。

マデイスは、咄嗟に、それを拳で掴んで、引き千切っていた。

触手は、千切れた後も、しばらくの間、トカゲの尻尾のようにのた打ち回っていた。

十

鬱蒼とした、森の奥の物陰に、彼はいた。

イゾルダは、やってきた男達をまじまじと観察していた。

彼らは、強い野心さえある。

自分達の力を誇示しようと思っている。

それらは、ダートのメンバーと大して代わりはしない。

イゾルダは、人というものが、どうしても好きになれない。

人間というものは、思考というものを持ってしまい、精神を持ってしまってから、不幸になったのではないのかと彼は思う。

だから、全ての者達から精神を奪ってしまえば、きっと幸福になるんじゃないのかと彼は思うのだ。思えば、精神があるからこそ、苦痛も存在し、あるいは裏切りというものも存在するのだろう。イゾルダはずっと、人間に対しての裏切りに苛まれながら、生きてきた。

彼は、種を落としていく。

それが、土壤に落ちて、怪物を生んでいく。

念入りに改良した生体兵器達だ。

それらは、ヒュドラのように、頭を伸ばしていく。

まるで、イソギンチャクとタコと、それから植物の蔓が混ざったような怪物だ。

彼の力ならば、あらゆる遺伝子を合成させられる。

不可能なのは、人間だけだ。ルブルが人間の死体を冒洩出来るが、イゾルダには人間の肉体を冒洩する事が出来ない。それは、人という種族自体が彼にとって、進化に値しない存在だと考えているからだ。生命の坩堝の中において、絶対に淘汰されなければならない存在。それこそが、人という生き物なのだ。

刀を持った男が、何度も、爆撃のエネルギーを、彼の創り出した怪物に与え続けていた。その度に、一度、怪物は焼け爛れていくのだが。どうやら、根まで焼き尽くす事は出来ないみたいだった。特に、此処の土壤は、より生体兵器が生き延びやすく、生長し易い場所となっている。彼らは、明らかに不利だ。

彼らはおそらく、ドーンのハンターの中では強い部類なのだろう。

しかし、それでも、イゾルダの力には及ばないのだろう。

イゾルダは、ある意味で言えば、この世界に蔓延る悪夢そのものを背負って生きている。

炎の渦が立ち上る度に、イゾルダは再び、種を大地に落として、肥料となるエキスも同時に、撒いていった。

ルブルの城にて、じっくりと、兵器の開発には勤しんでいた。

決して、人間共の力では及ばないように。

どうやっても、人の意志ではどうにもならない悪夢を生み出す為に。彼は、念入りに、自身の作り出す子供達に、この世界を破壊する為の力を注ぎ続けたのだった。

十

完全な敗走だった。

三時間弱、戦っていたが。レウケーもマディスも、雨の街に巢食う化け物を根絶やしにして、倒す事など出来はしなかった。

化け物は、燃やそうが、千切ろうが、再生を繰り返してしまう。結果として、二人共、憔悴し切ってしまい、止む無く戦いの続行が難しくなって、逃げてきてしまった。

イゾルダはきっと、違う都市に行って、新たに種を植え付けているのだろう。

そう思うと、やり切れなさばかりに襲われる。

イゾルダという敵は強過ぎる。

そいつ単体で、人類にとっての脅威そのものだった。

ダートという連中は、そういう者達ばかりの集まりなのだ。

一介のドーンのハンターが、そもそもどうにか出来るような相手では無いのかもしれない。ただ、分かっているのは、この災厄だけでも止める為には、根元であるイゾルダを始末する事、それ以外に他ならなかった。

「俺、戦線離脱した方がいいんですかね？」

マディスは、やり切れなさそうな顔をする。

レウケーも項垂れていた。

グリーン・ドレスにも、イゾルダにも、手も足も出なかった。

ルブルもメアリーも控えている。

ドーンは明らかに押されていて、危機的な状況に陥ってしまっている。

どうにもならない現実ばかりが、目の前に広がっているのだ。

信念だとか、意志だけでは、どうにもならない現実。

それが、膨大なまでの暴力なのだ。

十

アイーシャが、ルブルの城から出るのは何ヶ月ぶりくらいの事なのだろう。

外出は許されなかった。

けれども、今は侵略という名目の下、外で戦う事が出来る。

以前のような正義だとかの大義名分などはない。

かつては、騎士という地位に所属していた。

戦場で敵を殺す事に、楽しみを見出していた事もある。けれども、大義だとか信念だとか、そういう言葉が、全ての暴力を正当化してしまっていた。

もしかすると、メアリーは、自分自身の暗い陰なのかもしれない。

それを思うと、ぞっとせずにはいられない。

アイーシャは頭を横に振る。

今は未来なんて、無い。

メアリーに敗北してしまった時点で、それは決定してしまったのだから。

だから、今を戦おうと思う。

彼女は剣を振り回す。

金属の手足を手にしたのは、いつの日だったか。思い出せない。

この力は、自身の“能力”なのだと、後から気付いた。

でなければ、ずっとメアリーに弄ばれているだけの欠陥品だ。

それだけは拒まなければならないのだと、彼女の心は叫んでいた。

だから、力を手にしたのだろう。

城から、数キロ先に、炎が渦巻いている。

戦乱の地を思い出す。何だか、胸が躍りそうになる。

彼女は、あの炎が燃え広がる戦いに、自分も参加してみようと思ったのだった。

いつか、自分自身を取り戻す事が出来るのだろうか。分からない。やってみるだけの意味はある。反逆と反抗、メアリーに対してなのだろうか？

あるいは、この世界の中で生きている弱い自分自身に対してなのかもしれない。

醜悪で卑小なのは、セルジュだけじゃない。自分もそうなんじゃないのだろうか。

だからこそ、アイーシャは戦いへと出向く。

それが、ダートの目的の一環だとしても、徹底して間違った道を歩む事になったとしてもだ。

十

ケルベロスは、グリーン・ドレスという女の事を思い出す。

確かに、何処かで見た事がある。

確かにだ。

何処だったのだろうか。

直接、会った事は無かったのかもしれない。けれども、確かに知っている筈なのだ。

少しずつ、少しずつ、記憶を蘇らしていこう。

今、世界中では、イゾルダとグリーン・ドレスの二人が積極的に暴れ回っている。

国々は、破壊され続けている。

何とかして、止めなければならないと思う。

しかし、まだ、どうする事も出来ないとは思っている。

ケルベロスは、犯罪者のファイルが収まっている部屋へと向かった。

そこで、ドーンのランキングに入っている者達の顔を見ていく。

グリーン・ドレスの顔を見つける。

ランキングはAクラスだ。

つまり、かなり強力な能力者であり、放置され続けていたと言える。

何かがずっと、引っ掛かっている。

そうだ。

あのグリーン・ドレスという女の表情には見覚えがあるような気がした。

独特の飄々とした口元の笑み。

何かを思い出せそうだった。

そして、それは思い出せず

「ウォーター・ハウス……？」

それは、一度、アサイラムを破壊した者の名前だ。

彼の生死は正確には不明だが、一応、死んだとはされている。

かつては、上級ランクの犯罪者で、拘束された後、アサイラム専属のハンターになった。彼とはよく一緒に仕事をした。

ケルベロスは、施設の図書室へと向かった。

確かに、あの場所に挟まっていた筈だ。

それは、世界地図だった。

隣に、ヘーゲルという哲学者の『精神現象学』と、大航海時代の帆船の写真集などが置かれている。彼は、世界を掌握したかったんじゃないのだろうかと思う。

確かに、あの女は、暴君ウォーター・ハウスと関係があるのだろう。

ウォーターがよく開いていた本の中に、彼とあの女と一緒に写っている写真が挟まっていた。

二人は何だか、とても幸福そうだった。

ケルベロスは少しだけ、項垂れる。

因縁というものはあるのかもしれない。

ウォーター・ハウス。

彼は、副所長であるチェラブを殺害して、自身の能力である殺人ウイルスを、アサイラムの撒き散らして、アサイラムの外へと出て行った。

彼は、自由が欲しかったのだろう。もっと、本質的で、根源的な自由がだ。

もしかすると、これは因縁染みた対決になるのかもしれない。

ダートに集うメンバーは、何なのだろうか。

ダートを率いているのは、ルブルという女だ。彼女の何に、みな魅力を感じているのだろうか





アイーシャは、グリーン・ドレスと合流する。

緑の悪魔は、征服した区域の美少年を集めては、淫行に耽っていた。

緑の悪魔は、性欲というものに対して、奔放みたいだった。

「あはははっ、おかしい。どいつも、こいつも、私と抱き合おうと、燃え尽きて死んじゃう。早すぎるのよ、みんな、可愛い顔しているけどね。やっぱり、経験がとっても少ないのねえ？」

部屋の中には、大量の焼死体が転がっていた。

市民の家に押し入って、戦場に簡易的に作った休息地にて、彼女はこの辺りにいる自分好みの男を攫っては、侵略の証として凌辱していた。

彼女はまるで、逆ハーレムみたいなものを作っては、犯した美少年を焼き殺してしまう。彼女はそういう行為を、どうしようもない程に、止められないみたいだった。

アイーシャは、緑の悪魔に付いていけば、メアリーの精神的な蹂躪から抜け出せるかもしれな

と思った。

きっと、戦って、何かを勝ち取るしかないのだろう。
それだけが答えなのだろうから。

十

グリーン・ドレス。

彼女は、世界を征服する者だ。

それは、彼女の能力の根源そのものであると言ってもいいかもしれない。

緑の悪魔は、自らが暴力の象徴になりたいとさえ思っている。

破壊と欲望、蹂躪。それらはとてつもない程に、ある種の神聖ささえ感じ取る事がある。

兵器とは、古来より、征服の象徴だったのではなかろうか。

彼女は、兵器を纏う事が出来る者だ。

自衛とは名ばかりの、他人を支配して、奴隷へと変えていく恐怖そのものなのだ。

彼女は、それを纏いたい。

自らが、人々が抱くであろう、嫌悪の象徴でありたい。

そればかりを願って、彼女は戦い、動いているのだろう。

グリーン・ドレスは、アイーシャと組んで、各地の街を征服し続けていた。

ありとあらゆる場所に、破壊の痕跡が作られていった。

そして、緑の悪魔は、自分好みの美少年を見かけると、捕らえて、夜の慰みものにした後、燃やして殺した。

緑の悪魔は、女でありながらも、性行為の暴力性を抑えられない者だった。

アイーシャは、そんな彼女を見て、しばし呆れていた。

十

この国は、全身全霊の武力を持って、彼女を撃退しようとしていた。

赤い線が、空に迸っている。

ミサイルの照準が、空飛ぶ悪魔に向けられていた。

緑の悪魔は嘲っていた。

それは、人一人に使うには、余りにも遣り過ぎなパワーを持った武器だった。

ミサイルだった。

都市一つを破壊して、何十万名もの命を瞬時に奪える武器だった。

それが、彼女目掛けて、撃ち込まれていく。

グリーン・ドレスは、ミサイルを両手で受け止めていた。

そして、爆撃をその肉体に、吸収していった。

破壊のエネルギーを、そのまま自身の力として、纏う事が出来る。

炎とは彼女にとって、食料みたいなものだった。
兵器とは、簡単に吸収可能な養分みたいなものだった。
緑の悪魔は、アイーシャと共に、ある大国に攻め入っていた。
此処は、軍事国家グリズリーという場所だった。
全ては、灰へと変わってしまえばいい。
歴史のある建築物も、住宅街も、デパートも、何もかもが塵へと変わってしまえばいい。破壊そのものは素晴らしい、悲惨であるが故にどうしようもない程に、素晴らしい。
何度も、爆撃の攻撃が、彼女へと撃ち込まれる。
こんな時は滾ってくる。
そして、自らの中に、あの人の幻影が憑依していくかのように思えてくる。
全てを飲み込んでしまえばいい。
そうすれば、見えてくる地点があるのだろうから、と。
パルスという男が納めていた。
彼は、この国で首相をしていた。
他国の侵略戦争などによって、肥え太った国だった。
「踊れ、踊れ、踊れ、踊れ、みな、死のエクスタシーを味わうがいい。私は暴力そのものに、破壊そのものへと変わっていくんだっ！」
かつての約束がある。
約束は果たされなければならない。
きっと、それは永久に契られた楔のようなものなのだから。
婚礼のようなものは、かつて行った。
だから、会えない今も、彼と共に生きているような気がする。
グリーン・ドレスは、焔に包まれながら、それらの全てを吸収してしまっていた。
さながらそれは、神話のドラゴンを彷彿させた。

十

インソムニアは煌々と燃える、グリズリーの街を眺めていた。
彼女は、寝転がってキャラメル・ポップコーンを齧りながら、その光景に見入っていた。
いわく、破壊はとてつもない程に美しい。
人の悲鳴や恐怖、恐慌はどうしようもなく、美しいなあと思った。
空が、紅に焼け爛れていた。
肉の焼ける臭いが、此方にも満たされていく。
森に火の粉が飛んでいた。
彼女は、ぐびぐびと、ダイエット・コーラを飲む。
インソムニアが感じる、美の具現化。
それを、あの緑の悪魔という化け物は実現してくれている。

おそらく、敵は後、一週間だって待ってくれるだろう。

それならば、それで彼女は一向に構わなかった。

しばらくして、彼女は立ち上がる。

全身が、機械に覆われた兵隊達が、此方側にやってきたからだ。

どうやら、この機械兵達は、元々は人間の死体に機械を纏わせたもののようだった。インソムニアは立ち上がって、自身の肩に張り付いているタトゥーに、引き剥がれていくように命じる。それは鎧を身に着けた死神だった。彼女は、身体に二つのタトゥーを住ませている。鎧騎士と三つ首のドラゴンの二体だ。それぞれ、皮膚の色々な場所へと移動していくのだが、主に腕や首筋に収まっている。

彼女は鎧騎士の方を召喚した。

「いくぜ、『ダンス・マカーブル』。奴らに、死の舞踏を踊って貰うとするぜっ！」

インソムニアは、心の底から、嬉々とした感情が湧き上がってきているみたいだった。

十

アイーシャは、念入りに自身の武器を研いでいた。

彼女は真剣なまでに、自分の使う武器に固執しているみたいだった。

メアリーが嫌いだし、セルジュも鬱陶しいし、イゾルダの作り出すものも気持ち悪いから、という理由で、彼女は此処にいるのだった。

アイーシャは、緑の悪魔の側に付いた。

それは、もっとも合理的な理由で、消去法で選んだ、という事だった。

グリーン・ドレスは、楽しげに、この国の玉座に鎮座していた。

皇帝である、パルスという男の焼死体は、玉座の隣に転がっていた。

アイーシャの機械ゾンビ兵の一体が、グリズリーの中継をしていた。

映像は複数、並んでいるのだが。ある区域で、機械兵達が、次々に破壊されている場所がある。大鎌を手にした少女の姿が映っていた。

「あなたの、機械ゾンビ、どんどん倒されていっているわよ」

「いいのよ、別に。どうせ、私の『ネクロ・クルセイダー』なら、幾らでも大量生産出来る事だし。そのうち、あの子も消耗して不利になっていくんじゃないのかしら？」

そう言いながら、アイーシャはふわわっ、と、面倒臭そうな顔をする。

グリーン・ドレスは、どうしても衝動を抑え切れないみたいだった。

「私は出向いていくわ。弱い人達の為にね？」

彼女の全身が、赤い炎に包まれていく。

アイーシャは、ぽりぽりと、この国の名物の豆菓子を入れて口に入れて食べ続けているのだった。そして、リモコンを付けて、王室のみで中継しているアニメ画を見ているのだった。

十

炎の翼が、空を舞っていた。

大気が、どんよりとした赤を帯びていた。

ジェット・エンジンのような音が、辺りに響き渡っていく。

彼女は、破壊する事によって、自由を獲得したような気分になる。

グリーン・ドレスが、自身の能力である『マグナカルタ』を使い続けていたのだった。

炎が建造物を焼き払い、路上を火の海にして、ダムも熱湯へと変えていく。

人が創り上げてきた都市というものが、余りにも、簡単に崩れ去って行ってしまっていく。

装甲を守った機械兵が、街を占領していた。

インソムニアは、それらの兵士を次々と、大鎌で切り裂いていく。

死神の少女の方も、とても戦う事に充足感を得ているみたいだった。

彼女に向けられて、銃弾などが飛ばされていく。

インソムニアは、召喚した、三つ首のドラゴン・ゾンビを頭部の辺りに乗せるような形にして、何とか、致命傷を防いでいく。

グリーン・ドレスは、空からせせら笑っていた。

「あらあら、お馬鹿さんばかりねえ？ アサイラムではお世話になったわねえ。あなたのせいで、私は一度、あなた達に負けた事になっているのよ。その屈辱を晴らしてもいいわねえ。ねえ、でも、あなた達は所詮、地上を這う南京虫みたいなものなのよ。今度は、私を傷付ける事なんて、出来ないわ。さっさと、跪いて焼け死ぬがいいわあ？」

緑の悪魔は、噴出する、炎の翼を広げていた。

辺りは、更に増え続ける機械のゾンビ兵団によって、蹂躪され、街の者達が殺されていく。

破壊に次ぐ、破壊だ。

それは、留まる事を知らなかった。

インソムニアの肉体の欠損が酷くなっていく。

彼女は右手から、キルリアン・ストリーム of 負の光弾を撃ち続ける。

この能力は、周辺にある負のエネルギー、恐怖や不安などといったネガティブなエネルギーを弾丸へと変えている攻撃だった。だから、弾は尽きない。

しかし、インソムニアの肉体は、徐々に疲弊しているかのようだった。

突如。

颯爽と、鉛玉を撃ちまくる機械兵達を殴り倒していく男が現れた。

ケルベロスだった。

アサイラムの所長という役職を無視して、彼は前線に赴いてきたのだった。

彼は、宙に浮かんだ赤銅色の髪の女に訊ねる。

「お前、ウォーター・ハウスの女なんだろう？」

ケルベロスは訊ねる。

「あら、よく知っているわね。何処で調べたの？ あなた、女々しいストーカーなの？」

「俺は奴とは同僚だった。奴は一般的には、悪人と呼ばれる人種だったが、俺にとっては、とて

も良い奴だった」

「ふふっ、思い出は汚して欲しくないわねえ。あなたごときにはね。でも、そうねえ、あの人は、今、どうしているのかしら？」

「……死んだ、と聞かされている。まあ、友人が奴と戦って、その友人も消息不明なんだがな。処で、グリーン・ドレス、奴はかなりモテた。お前以外にも、女は幾らでもいたかもな」

それを聞いて、緑の悪魔は、額の血管を引くつかせる。

「あらそう？ なら、あなたは暫定的に、私の男の仇って事でいいわよね？ という事で、さっさと焼け死んで貰おうかしら？ 皮膚が弾け飛んで、肉が溶けて、骨が剥き出しになりながら、踊るように死ねっ！」

グリーン・ドレスの右手に、炎が収束していく。

やがて、それは剣のような形へと変わっていく。

「『マグナカルタ・イグニート・ソード』」

彼女は、炎の剣を振るっていた。

彼女の全身が発光するように燃えて、真っ黒な骨格が点滅しながら、浮かび上がっていく。

グリーン・ドレスは、とてつもなく楽しそうな顔をしていた。

炎が燃え盛っていく。

天から長く伸びた炎は、大地へと突き刺さっていた。

「弱い、弱い、弱い、弱い、弱い、弱い。下らないわねえ、何で、こんなに弱いのかしら？ 此処を守ろうなんて、とんだ羞恥プレイだったわねえ？」

炎が、大地を焼き焦がしていく。

彼女は、焼け爛れた鉄骨を振り回していく。

そして、辺り一帯にある建造物を、鉄骨で薙ぎ倒していく。

インソムニアと、ケルベロスは、炎の中へと包まれていく。

何百、何千度の炎へと達していくのだろうか。

彼女は、周辺から熱エネルギーをひたすら集め続けていた。

彼女は、自分の能力の限界の先を知りたいと思う。

もし、宇宙へ行く肉体を有していたら、太陽でさえも吸収してしまうかもしれない。

グリーン・ドレスは、恍惚と傲慢さに酔い痴れていた。

何もかもを、押し潰したい衝動ばかりに支配されていた。

突然、機械兵が、グリーン・ドレスの飛んでいる方向へと投げられていく。

彼女は、風を操作して、それを振り払う。

再び、機械兵の残骸が、彼女へと向けて投げられる。

「何かしら？ 無駄だって分からないのかしら？ もう、あなた達の能力なんて、私には通じないのよ」

突然。

投げられた機械兵の全身が変形していき、全身から、刃を生やしていく。

そして、さながらブーメランのように回転しながら、グリーン・ドレスの背中を深く裂いて

いく。

そのまま、緑の悪魔は旋回しながら、落下していく。

炎を全身から噴出しながら、彼女は呪詛の言葉を吐き続けていた。

「このまま、倒せるかな？」

ケルベロスは、全身に火傷を負いながら呟く。

「なあ、お前の能力どんな事しているんだよ？」

「俺の『アケローン』か？ 俺は、骨格のあるものを好きなように変形させる事が出来るんだ、自分の身体だってそうだ。俺は、あの機械兵の肉体を変形させて、刃物が突き出て、奴を狙って、回転していくように作り変えたんだ」

そう言うケルベロスは、突出した、再生能力を持たない。

全身火傷で、かなり苦しい状態に追い込まれているみたいだった。

インソムニアは、炎の中から立ち上がると、大鎌を持って、緑の悪魔に止めを刺そうとする。すると。

一閃。

一閃によって、インソムニアは、真っ二つに切り分けられていた。

インソムニアは上半身だけで、地面に転がっている事に気付く。

振り返ってみると、大剣を持った赤黒い髪の女が、インソムニアを二つに分けた事に気付いた

。

グリーン・ドレスは地面に落下した後、しばらくの間、呻いていたが、既に気を失っているみたいだった。

「お前の名前は何だ？」

赤黒い髪の女は、ケルベロスの鼻先に剣を突き付ける。

「俺の名はケルベロス、お前は？」

「私はアイーシャ。宜しく」

そう言うと、彼女は気絶している、グリーン・ドレスを肩に担いで、その場を離れていった。

「まあ、今回の処は引き分け、という事でいいかな？」

赤黒い女剣士は冷淡な顔で訊ねる。

ケルベロスは、首を横に振る。

この街はほぼ壊滅状態だった。

ルブル達は壊す為に戦っている。

しかし、ケルベロスは、守る為に戦っている。

なら、勝敗の理由もまるで違うものなのだ。

グリズリーは瓦礫の山と化している。民間人も焼き殺されて、兵士達はアイーシャの能力によって、機械の兵団へと変えられてしまっている。

何一つとして、彼は守れていない。

つまり……………。

「なら、俺達の完全な敗北じゃねえか」

ケルベロスは、地面に勢いよく拳を打ち付ける。

十

また、負けたのか？

懐かしい声が語りかけてくる。

きっと、その声は、自身の心の底にある深淵から聞こえてくるものなのだろう。

未熟さばかりが、彼には見透かされてしまう。

いつだって、自分の傲慢さをコントロールする事が出来ない。結果として、油断から負けてしまう事が多かった。今、生きているのは運が良かったせいもあるのだろう。

強くなりたい。

果ての無い程にだ。

自分は何処までも高く飛べるのだと思っていた。

どんな敵でも、焼き滅ぼす事が出来るのだろうと考えていた。

とてつもない程に、何処までも何処までも強くなりたい。

それこそが、ある種の美なのではないのだろうか。

彼女は、倒錯的なまでに自分の力に酔い痴れている。

だからこそ、彼は、彼女に何度も注意を施していたのだろう。

.....煩いわねえ、私の好きなようにさせてよ。

それは、記憶の底から、濁流のように湧き上がってきた。

.....お前は油断慢心が過ぎる。自分の力に酔うのはいいが、戦略で負ける事が多いだろう？

それは気を付けるべきだ。いいか、お前は持てる全力の力を使え。

暴君の声だ。

彼は、彼女にとっては、とても優しくかった。

.....お前は、油断慢心し過ぎだ。能力者ならば、持てる限りの力を最大限に効果的になるように使え。少なくとも、俺はそうしている。お前もそうすべきだ。

暴君は一つ、一つ、彼女にアドバイスを施していく。

きっと、彼は彼女を、彼好みの戦闘マシンにしたいのだろう。殺戮マシンなのかもしれない、しかし、それが彼の望みながら、それでも一向に構わないなあと思った。

彼女の、どうしようもない破壊衝動を認めてくれた男。

あるいは、宗教的なまでに、彼の言葉を、思想と呼べるものを、彼女は信仰しているのかもしれない。

何もかもを、破壊していく瞬間は、どうしようもなく強い快樂ばかりが広がっていった。きっと、人はその為に、生きているんじゃないのかとさえ思ってしまった。

彼女は朦朧とした夢から醒めていた。

.....

どうやら、此処はホテルの一室みたいだった。

アイーシャは、シーフード・カレーを食べていた。

貝は苦手らしく、わざわざスプーンで取り出して食べていた。

グリーン・ドレスの前に、幾つかの缶詰が置かれていた。

何なら、パスタなんかも買ってこようか？ とされる。

そして、彼女は、緑の悪魔を気遣うかのように、色々な料理を作ってくれていた。

料理は主に、精進料理なのか何なのか知らないが、薬草などがふんだんに入れられた魚料理などだった。緑の悪魔が辟易していると、アイーシャは、ただのハーブ料理だ、と告げた。

「そうそう、貴方、とにかく熱くて仕方が無かったから、冷やして傷を手当てするの大変だったのよ」

緑の悪魔は、自身の肉体を見る。

すると、丁寧に包帯が巻かれていた。

何だか、酷く罰が悪い。

もし、アイーシャがいなければ、あのままケルベロスかインソムニアかのどちらか相手に殺されてしまっていた事だろう。

「……………シャワーでも浴びてくるわ」

「あらそう」

グリーン・ドレスは、微妙そうな顔をしながらも、シャワー・ルームへと向かうのだった。

十

「ウォーター・ハウス、私、強くなる。殺人鬼になるっ！」

緑の悪魔は、切実なまでに、かつて、彼にそう告げた。

その頃は、純情な部分も、確かにあった。

暴君は、とても柔和な顔で笑っていた。

「俺は色々と思うんだが、お前の力の行き着く先に関して、考えてみたんだ」

男は、とても歪んだ笑みを浮かべていた。

「お前は、世界を征服しろ。それこそが、お前という存在の目的にすればいい。何もかもを踏み躪り、燃やし尽くしてしまえ。そこにお前にとっての自由がある筈だ」

それを聞いて、彼女は、瞬時、呆けたような顔をしていたが、すぐに彼の言っている事だから、きっと凄い事なのだろうと思った。

辺りは、真っ赤な色彩が広がっていた。

二人は、そんなものをとてつもなく、美しいと感じてしまっていたのだった。

窓からは、風が入り込んでくる。

とてつもなく、神秘的に思えた。

彼女は、彼から首飾りを貰った。

それは、彼の牙を加工して作ったものらしい。

それは、模擬的な、ウェディングの儀式だった。

辺り一面には、標的の死体が血塗れで転がっていた。

グリーン・ドレスは、自身の能力によって、この館を焼いていく。

人間の死体の焼け焦げていく臭いが充満していく。

暴君は、花でも嗅ぐように、その臭いを楽しんでいた。

ウォーター・ハウスは、ウェディング・ヴェールとして、血塗れのカーテンを、彼女の頭に飾り付ける。

それは、とても魅惑的な一夜だった。

絶頂的なものを強く感じていたい。

人生とは、きっとこういうものなのだろうと、彼女は思った。

十

「炎というものは、男性的な暴力の象徴のようなものだ。グリーン・ドレス、お前は、女でありながら、炎の能力者だ。お前は男性的なエネルギーの赴くままに、他者を踏み躪り、略奪し、凌辱しろ。それこそが、お前に与えられた使命のようなものなのだろうからな」

そう言いながら、男は、彼の上に跨る。

彼は、殺人ウイルスを使う者だった。

対する、グリーン・ドレスは、炎を扱う者だ。

「肉体には苦痛を、精神には幻想を。俺達は夢物語で他者を踏み躪る。俺は、観念というウイルスを撒いていきたい。きっと、俺が死んでいった後も、俺の力は残るんじゃないかと思っている。なあ、お前、俺は永遠だと思うか？」

「ええ、私、あなたが永遠なのだと思う。ずっと、……たとえ、あなたが死んだとしても、私の中で、生き続けるんだと思う……………」

欲望を絡ませながら、お互いの能力で、お互いを殺そうとする。

それは、どうしようもないくらいに背徳的な行為だった。

死の耽溺に満ち満ちた夜を、二人でベッドの上で過ごしていた。

とてつもなく、幸福な時間だったのだと思う。

どうしようもない程の、破壊衝動と破壊衝動をぶつけ合い、そして、二人は身体を抱き締め合っていた。狂気の先に行ってみたい、そこで見えるものがあるのかもしれない。そんな事も語り合った。

殺人ウイルスの抱擁と、焦熱の抱擁。

二人共、全身が崩れ去りながらも、互いを受け入れていた。

暴君は言う。

何度でも言う。

緑の悪魔に対して、征服者になれと。

この世界の地上の支配者になればいいのだと。

それは、とてつもなく魅惑的な提案だった。

決して、汚してはならない思い出だった。

彼女は、彼の恋人であると同時に、彼の異常なまでの思想の伝承者でもあるのだという自覚があった。彼は学問に通じていた為に、難しい事はよく分からない。しかし、とにかく、感情の赴くままに、欲望の赴くままに行動する事こそが、彼にとっての敬意であり、言うなれば、ある種の信仰のようなものだった。

かつて。

かつて、緑の悪魔は、所謂、“普通の人間”をやっていた事もある。

グリーン・ドレスは、元々は、昼間はカフェのウェイトレスをやって、夜はバーの踊り子をやっていた。普通の人間だった。けれども、いつからおかしくなったのだろう。

初めて付き合った彼とベッドでの行為の最中に、思い余って、相手を殺害してしまっていた。男の顔は、壁にべっとりと張り付いてしまっていて、彼女は自らは強力な暴力を振るえる存在なのだと、嫌でも自覚せざるを得なくなった。

自分の破壊衝動、暴力衝動を、どうにかしなければならぬ。

それはきっと、この世界で生きていく上ではあってはならない力なのだ。

だから、封印して生きなければならぬ。

顔を潰されて死んだ男が、空ろに笑っているような気がした。

グリーン・ドレスは、その男の死体を見て、何も感じなかった。しかし、初めての割には余り、何も感じていないなあ、というのが本音だった。

……こいつ、下手糞なんじゃないの？

そんな事を思いながら、彼女はホテルを後にした。

しばらくの間、自分の中にある破壊衝動、他者への征服欲を押し殺して生きようとした。けれども、どうにもならない時は、ひっそりと殺した。派手な蹂躪を行う事もしばしばあった。いつしか、彼女はドーンから指名手配犯として追われていた。

そんな時の事だろうか、あの男に出会ったのは。

彼は、彼女の全てを認めてくれた。

とてつもなく包容力があり、カリスマ性に満ちていて、一般的に見れば、異常なくらいに、残忍で冷淡な性格の男だった。彼女は、彼の全てに惹かれていった。

十

アイーシャは、混乱していた。

何故なのだろう？ グリーン・ドレスといるのは、妙に心地が良いのは。

分からない。

何も、分からない。ひょっとすると、考えたくないだけなのかもしれない。

このまま、深く落下していくかのような気分になってしまっていた。

自分が何者なのかが分からなかった。

かつては、正義の為に、戦っていたような気がする。

しかし、今は完全なまでに、悪しか為していない。

そもそも、正義って、何だって話だ。

ケルベロスを見ていると、やはり違うのだろうと思ってしまう。

しかし、何故なのだろう。緑の悪魔に憧れさえ抱いてしまうのは。

メアリーも、緑の悪魔も本質的な何も変わらない。

そう、悪そのものなのだ。

アイーシャは、自らの都合によって、メアリーと緑の悪魔を切り分けているに過ぎないのだ。あるいは、正義と悪なんてものは、そういった切り分けの集積体によって、積み重ねられて作り上げられていくものなのかもしれないのだろうなあと思った。

つまり、それは天秤のように、簡単にどちらかへと向かっていくものでしかないのだ。

緑の悪魔は、何故だかとても自由そうだった。

そう、きっとそうなのだろう。そういう部分に、どうしようもなく惹かれてしまうのだった。

肉体は、いつにも増しておかしい。

眩暈や頭痛と共に、全身に違和感を覚えてしまっている。

幻肢症というものなのだろうか……？

ある筈の無い、手足が動いているかのように思える。

手足が欲しかったからこそ、彼女は金属で、自らの手足を作り出した。

切実なまでに、メアリーに対して、復讐してやりたかった。

彼女によって、アイーシャは、自分の誇りも何もかも、壊されてしまったのだ。

ずっとずっと、悪夢の中を彷徨っている。

ダートに加わって、自らが征服者となっている事に対して、まるで理解していない自分がある。

だからこそ、だからこそ、自分を取り戻さなければならない。

失ったのは、四肢なんかじゃなくて、本当に大切だった自分自身なんじゃないのかと思わずにはいられない。

もし、仮に、自分の新たな四肢になってくれる相手が現れたのならば、その者には喜んで尽くしたいなあとも思った。

自分を導いてくれる導のような、存在が現れて欲しい。

彼女は、そんな事を切実に願い始めていた。

運命は捻じ曲げたい。

それこそが、自分が誰かの隷属の下で生きているわけではないという事の証明なのだから。それこそが、きっと今の自分の戦いなのだろうから。

「ねえ、グリーン・ドレス」

「あら、何かしら？」

緑の悪魔は、気だるそうに、缶ビールを開けていた。

「私のお願い、聞いてくれないかなあ？」

アイーシャは、誠意を込めて、ある提案をする。

すると、緑の悪魔は、二つ返事で了承してくれたのだった。

十

メビウスは、暗い森を突き進んでいった。

確か、情報によれば、この辺りに、ルブルの城がある筈だ。

メビウスは有無を言わずに、敵の首領を倒す事を念頭に入れた。

それこそが、戦いにおいての、定石と言えるものなのだろうから。

「おい、待てよ」

後ろから、声が聞こえる。

振り返ってみると、腰元まで髪の毛を伸ばした女が立っていた。

「お前、メビウス・リングだろ。この俺が始末してやるよ」

メビウスは、興味を無くしたように、先に進む事にする。

「おい、待てよ。俺はダートのメンバーだ。俺がお前を倒してやるよ」

メビウスは、人間と言う処の、鼻で笑うような仕草をする。

「お前、“男”か。私はお前程度は、抹殺対象にしない。お前の肉体はどう見ても、ただの人間女性大程度しかない。せいぜい、命は大切にする事だな」

そう言いながら、メビウスは彼にまるで興味を示さなかった。

「見てろよ、俺の能力はすげえんだぜ？」

ぶわっ、と、辺り一面の木々が、捻じ曲がっていく。

風が吹き抜けて、一面の空間自体が、渦巻きを帯びているかのようだった。

「お前ごときでは、私は倒せない。では、私は行くぞ」

そう言って、金色の巻き髪をした球体間接人形は、セルジュを置いて行ってしまった。

彼は、茫然自失のまま、女の去っていた場所をずっと眺め続けていた。

セルジュは、一人取り残されて、途方に暮れていた。

敵からも、戦力外通告をされてしまったという事なのだ。

「ああ、畜生。畜生、俺はそんなに弱いのかよ？ ふざけやがって、ああっ？」

彼は悔しくて、涙が頬を伝っていた。

自分は、無能で、無力なただの屑だ。そんな思いで、いっぱいだった。

十

「どうやら、あちらからも攻めてきたみたいね」

ルブルはとても楽しげに笑っていた。

どうしようもないくらいの高揚感が、彼女を支配しているのが分かった。

彼女は狂喜している。

まるで、深淵を覗き見る者の顔をしていた。

自らが死んでいく事さえも、もはや遊戯でしかないかのように思えて仕方が無いのだろうか。

奥から、メアリーが現れる。

「どう？」

「ふふっ、お人形さんが迷い込んできたみたい。ねえ、ずっと迷わせてみる？ それはそれで、とっても楽しい事なのかもしれないけれども」

「うーん、困ったわねえ。私の『マルトリート』も、持続力に限界があるのよ。いつまでも、使ってもらえないものなのよね」

そして、メアリーは心配げな顔で、魔女に言う。

「処で、セルジュがいなくなったのだけれども。何処に行ったのかしら、とっても不安なの……………」

セルジュはいてくれるだけで、それでいい。

それが、メアリーの本心だった。

彼の能力は、確かに強力なものだが。それを使いこなすだけの機転などが、彼にあるとは、とても思えなかったからだ。

十

メビウスは、ルブルの城だと思ふ場所にまで辿り着く。

城は奇形的な形をしていて、何度も、何度も増築したみたいな形状をしていた。

おそらく、幻影の能力なのだろう。

その城は、辺り一面に幾つも聳え立っていた。

メビウスは思考する。

「さて、私を永遠に迷わせるつもりなのか？」

それはそれで、駆け引きの勝負になるだろう。

メビウスは、精神力では負けるつもりはまるで無かった。

人間ごときの浅はかな思考の前に、ひれ伏すつもりなど、まるで無かった。

ウロボロスの回転の力は、ほぼ無敵だ。

以前よりは、力を失ってこそいるが、それでも強大な力には変わらない。

力を持つという事。

それが、統治者としての使命なのだ。

メビウスは、ドーンの統治者だ。

だからこそ、そこら辺の能力者共など、簡単に肉塊に変えられるだけの力を有していなければならなかった。

十

メアリーの幻影が幾つも現れては消えていく。

空中に突如、浮かび上がる、斧や槍などで攻撃するのだが。
幻影に混ぜて、ルブルの作り出した歯や爪の伸びたゾンビなども突撃させる。
悉く、それらが破壊され尽くされていく。
メビウスは、回転の攻撃である『ウロボロス』によって、それらの幻影を破壊していく。
彼女の力の前では、鉄のように強化した幻影も、全ては紙屑のようなものだった。
キリが無いな、と彼女は思う。
しかし、持久戦には持ちこたえるつもりでいた。
幻影の中に、一枚の鏡があった。
そこに、メビウス自身は映し出されていた。
鏡がひび割れていく。
右側回りだった。
彼女は、咄嗟に、後ろに飛び退く。
完全に、行動が遅かった。
ぱきり、という音がする。
鏡が、弾け飛んだ音だ。
すると。
メビウスの、右腕が砕け散っていた。
そして、次に、右脚が砕け散っていた。
何をされたのか、まるで分からなかった。
メビウスは、そのまま地面に倒れそうになるが、回転の辺りに巡らせる事によって、その場に立ち続ける。
かなり、拙い状況だった。
かなりのダメージを負ってしまっていた。
しかも、四方に逃げ場が無かった。
いつの間にか、彼女を破壊した鏡の幻影が、彼女を覆おうとしていたからだ。

十

「してやられたわね」

メアリーは、溜め息を吐く。

数十メートル程先に、それは作られていた。

孔だ。

地面に、大きな孔が開いていた。

メビウスは、地面を割り貫いて、此処から逃れたのだった。

セルジュは、わなわなっ、と震えていた。

「なあ、メアリー。俺、役に立ったよな？ 俺、役立たずじゃなかったよな？」

「ええ、セルジュ。貴方は強かったわよ、確かに役に立った」

メアリーはとてつもなく、優しい笑みを浮かべる。
そう言って、メアリーはセルジュを強く抱き締める。
その後、彼女は彼の長い髪を撫でていくのだった。

十

イゾルダは表記番号を与えられて、ずっと試験管の中で育てられていた。
彼を研究している白衣の者達は、彼に対して、様々な実験を行っていた。
イゾルダは、色々な生物の遺伝子を注入され続けていた。
どうやら、彼は何度も、何度も、失敗した実験体らしかったのだが、彼の場合は、中々死なないサンプルとして生かし続けられていた。
試験管から出されて、何名かの者達と友人になったのだが。何日かすると、友人達は、焼却処分されたり、よくても標本として飾られたりしていた。
自分が何の為に生まれてきたのか。
そして、友人達が何の為に死んでいくのか。
彼にはまるで分からなかった。
どうしても、理解し難い、不条理でしかなかった。
ずっと、何の為に自分は生きているのだろうか。そんな思いに駆られ続けていた。
しかし、ある時、彼もまた、死刑宣告を下されたのだった。
それは、彼の力が余りにも、強大になり過ぎたのと。余りにも、人ならざる知性を持ってしまった為らしかった。
それまで、信じていた研究者達は、彼を冷たい視線で見つめているだけだった。
確かに、彼らは述べたのだった。
人類の為に、彼は死ぬ必要があるのだ、と。
そう宣言された時、ならば、死ぬべきなのは、どちらなのかと彼は考えた。
結論は、自分が生きる道だった。
そして、彼は憎悪と共に、その場所を脱出した。何名もの血塗りの死体が生まれた。
ルブルの精神の伝令が訪れるまで、彼はひっそりと闇の中で暮らしていた。
彼に光を与えてくれたのは、ルブルだった。
だから、彼はダートに尽くしたいと、ひたむきに願うのだった。



グリーン・ドレス



暴君、ウォーター・ハウスは、よく図書室に入っていた。

ケルベロスも彼の付き添いのようなもので、よく図書室のソファーに寝転がっていた。そして、砂糖のたっぷり入ったコーヒーを啜る。それが日課にもなっていた。

彼は、ぼんやりと思索に耽るのが好きな男だった。

いつも、何を考えているのか、分からない時も多い。

彼はどうやら、今日は、地球儀の模型図にはまっているみたいだった。世界各国は、それぞれ、自国を中心に地球儀を作っていた。そして、地球儀の歴史というものにも、興味を抱いているみたいだった。遥か昔、この惑星の周りを、あらゆる天体が回っていると見なされていた。しかし、今では、この惑星そのものが、宇宙を回っている。

決して、此処は宇宙の中心では無かった。

しかし、彼は、それよりも、何故、人が自らを中心だと思いたがるのかについて、思索しているみたいだった。

ケルベロスは、キャンディを舐めながら、煙草の代わりにする。

図書室では禁煙だからだ。

「なあ、ケルベロス」

「何だ？」

「何故、人々は世界を支配したがるのだろうか。俺にはそれはとても興味深く映る。何なのだろうか、人間という生き物は。高みを目指し、上昇志向を持ち、誰よりも高い塔へと上りたがる。それが人という種族なのだろうかあ」

そして、彼は本を棚に戻すと、おもむろに意外な事を口にする。

「あのな、俺は今、どうやら好きな人間がいるらしい」

ケルベロスは、怪訝そうな顔になる。

「何だ？ それは、珍しいな」

「ああ、此れ見ろよ」

そう言って、彼は通信機に保存してある写真を見せる。

「何だよ、これ。後ろ血塗れじゃねえか。何だよ、お前と似ているような女だな」

「まあ、言うな。それから、一応、殺した奴らは、賞金首の連中だぞ。つまり、合法だ。なあ、ケルベロス。俺は最高な夜を眼にしたよ。この女、この後、此処に移っている館に火を放ったんだ。そして、笑い転げていた。あれは、素晴らしかったなあ」

そう言いながら、彼は唇を指先で弄っていた。

「とても楽しい夜だった。彼女となら、何でもやれそうな気がした」

「はっ、言うなあ」

ウォーター・ハウスは、ソファーに腰を下ろす。

彼はいつも、植物だとか、帆船だとか、気球だとか、宇宙だとかの本を熱心に読んでいた。そういうものが、とても好きなのだろう。

「なあ、ケルベロス。聞きたい事があるんだが……」

「なんだよ？」

「女を幸せにするってのは、どうすればいいのかな？」

ケルベロスは、思わず、飲み物を噴出しそうになる。

「分からんな、俺には分からん。俺は狂っているのだからな……」

普通の幸せの形、って何なのだろうかあ。

彼は、そんな事をぶつぶつと呟いていた。

ケルベロスは苦笑する。

その時の暴君の横顔が、どうしても忘れられそうになかった。

「コッペリアはいるか？」

暗い工房の中に、メビウスは入っていく。

中には、陰気そうな美少年が、ひたすら粘土をこねくり回していた。

彼は、メビウスの身体を見て驚愕する。

「メビウスさま、その……………」

「ああ、油断していた。戦力外だと思っていたんだけどな」

見ると、メビウスの右腕と右足が欠損していた。

コッペリアは、焦りながら、すぐに代えの部品を彼女の手足にくっ付ける。

メビウスは、新たに付けられた手足を動かしていく。

「駄目だな、以前よりもウロボロスの力に耐え切れない」

そう冷たく言い放って、メビウスは工房を出て行く。

コッペリアはいたたまれない顔になっていく。

メビウスは振り返って、彼に告げる。

「じゃあ、コッペリア。私は行くが。お前の腕が上達して、私の力を可能な限り、引き出せる実力にまで上がる事をとっても期待しているぞ」

そう言って、彼の主人は、暗闇の中へと消えていってしまった。

後に残されたコッペリアは、複雑な顔で、粘土の塊と、焼き釜を眺め続けているのだった。

十

ルブルとメアリーは勝利の美酒に酔い痴れていた。

もう、ドーンはまるで相手にならない。

目前には、勝利しか見えなかった。

「ふふふっ、あはははっ、ワーグナーの『トリスタンとイゾルデ』を流しましょう？ みんな悲恋のうちに沈んでいくの。太陽は消えてなくなる。暗黒の星空だけが、この地上を覆い込む事になる。それはとっても素敵な日々の幕開け」

メアリーが歌うように、上機嫌に言葉を語っていく。

そして、おもむろに、レコードを引っ張り出してくる。

此処は、食堂だった。

色々な料理が用意されている。祝賀会の準備だ。

セルジュが、何だか、少しだけ申し訳なさそうな顔をしていた。

しかし、メビウスを撃退したのは事実だ。メアリーからは誇っていいと言われている。

「俺、此処にいてもいいんだな？」

彼は訊ねる。

「何言っているのよ、貴方は私達の仲間なんだから」

セルジュの顔は、はにかんでいた。

「さてと、ロースト・ビーフを用意してあるの。それから、ケーキも作っている。後は、他の人達の帰りを待たないと……」

こつり、こつり、と通路の辺りから音が聞こえてきた。

誰かが帰ってきたのだろう。

メアリーは、とても嬉しそうな顔をする。

「あら、グリーン・ドレス。それから、アイーシャもいるのね。みんなよくやってくれているわね。もうすぐ、ドーンは終わる。人の世界も終わっていく。私達は勝利する。ねえ、これからパーティーでも開こうと思っているんだけど、どうかしら？」

緑の悪魔と、赤黒い髪の女は顔を伏せながら、何かを考えているみたいだった。

「その事なんだけれども」

アイーシャは、ぼそぼそっ、と呟くように言う。

グリーン・ドレスは前に出た。

そして、彼女はまるで有無を言わせなかった。

「私達は裏切ってやるよ、間抜けがっ！ 『カラミティ・ボムッ』！」

グリーン・ドレスの右手から、ルブルとメアリーに向けて、炎の弾丸が発射されていく。

食堂はそれなりに広がった為に、

離れていたセルジュが吹き飛ばされて、壁に強く背中を打ち付けたみたいだった。

彼は蒼褪めながら、部屋を出ていく。

「アイーシャの方が面白そうだから、私はこうするわ。あなた達と争った方が、よっぽど、歯応えがありそうだからねえ？」

そう言って、緑の悪魔は、腹を押さえて笑っていた。

燃え盛る焰の中、ルブルを担いだメアリーが現れる。

「ねえ、緑の悪魔。アイーシャ、置いていかない？ そうすれば、その事に免じて、今回の事は眼を瞑って上げる。ねえ、アイーシャ。たっぷりと、おしおきしてあげるわ」

グリーン・ドレスは、有無を言わずに、彼女達を、焼き尽くしていく。

ルブルとメアリーは焼けながら、宙へと消えていく。

幻影なのだ。

「グリーン・ドレスッ！」

「ええっ！ ふざけやがって、この便所の小便にも劣る。タンカス共が」

彼女は、炎の弾を撃ち込み続けていく。

別の場所から、メアリーが斧を持って姿を現した。

メアリーは、くすくすと笑いながら、斧を振り回してきた。

グリーン・ドレスは、更に、そのメアリーも炎で弾き飛ばしていく。

「城ごと、燃やしても意味無いかもしれないわねえ」

そう言いながらも、彼女は一面に、炎のカーペットを撒いていった。

必ず、本物がいる筈なのだ。

考えるべきだ。

暴君が言っていた事。

それは、自分自身の能力を最大限に、使え、という事だった。

グリーン・ドレスの腹から、大きな眼のヴィジョンが現れる。

それは、温度を“サーチ”するものだった。

彼女の腹の眼は、腹から外れて、床へと張り付いていく。そして、二つに分かれて、勢いよく辺りを這い回っていく。

十数メートル先の壁の向こう側に、二つの走る体温がある。

グリーン・ドレスは、そこを目掛けて、全身に炎を纏いながら、自身を一個の弾丸へと変えて壁を割り貫いていく。

ルブルとメアリーが、懸命に走っていた。

緑の悪魔は、そのまま、炎の翼で二人を焼いていく。

.....こっちも、困だ。

二人の姿が、ランタンを持った二体のゾンビへと変わっていく。

あちらも、かなり戦略を練り込んでいる。

グリーン・ドレスは、立ち止まって、周囲を見渡した。

メアリーは、天井に張り付いていた。

そして、両手に鉈を持って、彼女を狙っていた。

「あなた、本物だろう？」

緑の悪魔は笑顔を浮かべる。

メアリーは首を縦に振る。

「緑の悪魔、貴方は元々、とても扱い難そうだとは思っていた.....」

「はっ、それで、私を騙せたと思っているのかしら？ セクシーな真っ黒な骸骨にしてやるよ。この、女性器の分泌液臭い、ゲロのようなメス豚がっ！」

グリーン・ドレスは、人差し指と中指で、輪を作って、それに舌を入れる。

メアリーは、相変わらず、下品ね、と告げる。

メアリーは、透明で強固な盾を作り出していた。

グリーン・ドレスは、その盾を紙屑のように引き裂いて、メアリーの左腕を、右腕で掴んでいた。

メアリーは、右手で、大鉈を手にして、グリーン・ドレスの腹の辺りに深々と突き立てていた。

くるり、くるり、と、二つの斧が空中で旋回していく。

そして、それはそのまま、回転しながら、緑の悪魔の首を切断しようと迫っていた。

緑の悪魔の全身が、明滅して、真っ黒な骨格が透けて見える。

おそらく、この状態の時、彼女は感情をより高ぶらせているのだろう。

装甲を破られた、メアリーの胸が、腹が、下半身が炎によって包まれていく。

大鉈を持っていた右腕も、いつの間にか、床に落ちてしまっていた。

メアリーは、両眼で、グリーン・ドレスを見据えていた。

そして、酷く苛立っているみたいだった。

「あら、貴方はアイーシャと違って、私の“切り札”が効かないのかしら？」

「何を言っているか、分からないわねえ？」

緑の悪魔の両足に、無数の腕が伸びていく。

それは、床の辺りから生えていた。

メアリーは、緑の悪魔を倒すつもりでいるみたいだった。

たとえ、自分の半身が破壊されようとも、その覚悟は決まっているみたいだった。

「とっくに、肉体がゾンビになっているのね？ ルブルの力だろ？」

メアリーは頷く。

新たな幻影の作成に、メアリーは取り掛かっていた。

緑の悪魔の背後で、弓矢の幻覚が生まれ、実体化していく。

そして、矢が次々に、緑の悪魔へと襲い掛かっていく。

彼女は、それらの矢を全て歯だけで受け止める。

「化け物はどちらよっ！」

メアリーは、思わず叫んでいた。

辺り一面から、無数の斧や槍、剣などが生まれてくる。

メアリーは、一斉に、それをグリーン・ドレスへと向けようとした。

それは、一瞬の出来事だった。

アイーシャが現れて、メアリーの首を大剣で、切り落としていた。

その瞬間、アイーシャは、確かに、メアリーが嘲っているのを見ていた。

「『マルトリート・クラウディ・ヘヴン』、アイーシャ。何で、私は死なないのかしら？」

それは、呪詛の言葉だった。

ごろん、と、メアリーの生首が床に転げ落ちる。

十

それは暗い、冷たい空間の中だった。

メアリーが目の前に立っている。

首を切り落としても、心臓を抉っても、内臓をぶち撒けても、縦に裂いても死なない。それ
処が、徐々に、自分の心が、彼女によって蝕まれていく。心が隷属を求めているような気がする
。このまま、彼女の言いなりになれば、どれ程に良い事なのだろうか。

途端、どうしようもない程の、憎しみが湧き上がってきていた。

全ての不条理に対する、憎しみ。

ありとあらゆる生命に対する怨嗟。

手足の無い自分、手足のある者達を激しく憎んでいる。

自分の境遇をいつの間にか、嘆いていた。何故、人を殺し続けなければいいのか分からな
かった。自分自身に、憎しみの刃が向く。自分など、生きていていいのかと思わずにはいられなく

なる。全身が、切り刻まれればいいんだ、という甘い魅力が迫ってくる。

もはや、自己というものを消滅させたくなくなってしまった。

自分自身が、消え去ってしまえばいいんじゃないのかと、底知れない暗黒の空間へと落下していくかのような気分になってしまっていた。

十

「何しているの？ アイーシャ」

グリーン・ドレスの声で、アイーシャは現実へと戻る。

全ては、幻覚だったのだ。

メアリーは、生首のまま、地面に転がっている。

「『クラウディ・ヘヴン』って言うのね？ その力、“精神に幻影を見せる”のか。ふざけやがって……。だから、私が貴方を殺しても死ななかったのか。何度、殺しても死ななかったのか。ふざけやがって、ふざけやがってっ！」

アイーシャは、再び、メアリーに剣を突き立てようとする。

グリーン・ドレスが、彼女の手を掴む。

「罪悪感に反応するんじゃないのかしら？ 私には、そんなものは無い。だから、彼女の小細工は効かない。だから、止めは私が刺す」

緑の悪魔は、炎の剣を生み出して、振り翳そうとする。

そして。

次の瞬間、自分達が負けてしまったんじゃないのかという事実を突き付けられる。

メアリーの生首は、床から這い上がってきた無数の腕によって、地面の奥底へと逃がされてしまった。

緑の悪魔は、地面を燃やし始めるが。既に、遠くへと逃れられた事を理解する。

緑の悪魔は、アイーシャを抱き抱える。

「一端、外へと逃れるわよ」

彼女は、炎の翼を噴出させていた。

「いや、私はやっぱり、此処でメアリーを倒したいっ！」

「そう、分かったわよ。じゃあ、やっぱり、城ごと燃やすわっ！」

そう言いながら、グリーン・ドレスは、城中に片っ端から炎を放っていた。

そして、城から逃れる中で、空へと続く場所を見つける。

塔か何かの中なのだろうか。

二人は、そこを飛んでいく。

空へと出る。

「やった、ようやく外に出れた」

「いや……………」

グリーン・ドレスは、炎を再び、周囲へと撒いていく。

空の何も無い空間から、無数の腕が伸びて二人を掴もうとしていた。

「空の幻影まで作っているのね。アイーシャ、まだ此処は城の中みたいよ」

緑の悪魔は、アイーシャを連れて、飛び続ける。

辺りに爆炎を撒きながら、飛び続けていた。

そして。

ようやく、日の光のようなものが差し込んでくる。

気付くと、二人は燃え盛るルブルの城を眺めていた。

空はとてつもない程に青空だった。これは間違いなく、幻影ではなくて、現実の一部分なのだろう。

「倒し損ねたわね……………」

グリーン・ドレスは、悔しそうに言う。

アイーシャは、首を横に振る。

アイーシャは、もうどうしようもないくらいに、自由な自分を見つけたような気がしていた。

十

ヴェルゼは動き出す事にした。

彼はいい加減に、この牢獄から抜け出そうと思った。

彼は、ぐいぐいっと、自分の頭蓋の部分に入っている、能力の抑制装置を引き抜く。それは、かつての副所長の能力を機械の部品化したものだと聞かされている。

能力者の能力を封じる能力だ。

ヴェルゼの額から、血が流れ続ける。

彼は一向に気にしない。

そして、難なく扉をこじ開けていく。

何名もの、看守達が、彼の下へとやってきた。

「ふふっ、うふふっ、『ディアブロ』と名付けているんだ。僕の力」

彼は看守達の横を通り過ぎていく。

看守達は、全身が氷付けになって絶命していた。

ヴェルゼは、ひたすらに笑った。

自分自身を解放してしまおう。そうする事によって、自らの中にある化け物を放ってしまおうと思うのだ。

そして、彼は背中が裂けていく。

すると、昆虫のような翅が生え始めていた。

十

会議室は、椅子とテーブルと、ホワイト・ボードが置かれている簡素な場所だった。

ケルベロスを中心に、所長秘書のリレイズ。

それから、インソムニア、レウケー、マディス。

そして、メビウス・リングが椅子に座っていた。

「全員、誰も倒せなかったみたいだな」

メビウスは冷たい声音で言った。

それは、どうしようもない事実だ。

特に、レウケーとマディスの落ち込みようは、生半かなものではなかった。

二人は、今すぐにでも、この任務から降りたような顔をしていた。

それ程までに、敵の力は圧倒的なのだ。

どうしようもないくらいに、差が開き過ぎている。

虫が大型肉食獣と戦うようなものだ。

大群で攻めたら、もしかすると勝てるかもしれない。しかし、人間は虫ではない、犠牲者の数を考慮するととてもではないが、暗鬱な気持ちになるばかりだった。

メビウス自身でさえ、任務には失敗していると言っていい。

「私は“デス・ウィング”の処へと向かおうと考えている」

メビウスは、そう告げた。

「彼女ならば、私達の力に、なってくれるかもしれないからな」

そう言うと、メビウスは立ち上がって、部屋を出ていく。

会議室を出た後、ケルベロスは暗澹たる気持ちになっていた。

このままでは、ドーンは敗北必須だろう。

何にしても、ドーンの甘さが原因となって、それはが糾弾され続けている。

ダートの者達のせいで、どれだけの者達が命を落としてしまったのか。それは計り知れない。

ケルベロスはその事を考えると、全てが無力で、果たして自分の行っている事は、何もかもが徒勞でしかないのではないのかという気になってしまう。

それでも、それでもだ。

戦わなければならないのだとも、言い聞かせている。

みな、敗北している。

一体、どうすればいいのか分からない。

何もかもが、無力感ばかりを突き付けられずにはいた。

しかし、とにかく動く事しか出来ないのだ。

そうやって、災厄を終わらせていくしかないのだ。

そう。

グリーン・ドレス達とは、戦った。

結局の処、敗戦を強いられた。

ならば、今度は、イゾルダの方と戦おうと考えている。

そうする事によって、何かが変わるかもしれない。

レウケーは、生体兵器の処理に関して考えている。

インソムニアは、飄々としながらも、やはり何処か悩んでいるみたいだった。

倒せない。

どうやっても、倒せない敵.....

自分の中に、もっと力があるのだろうか。ケルベロスは、その事に関して自分自身と対話したい。

アサイラムの小綺麗な壁に設置している、窓の外から何かしらの不協和音のような音が聞こえてきた。それは、徐々に大きな音へと変わっていく。

ふと。

ケルベロスは、外から聞こえてくる音に気付く。

それは、プロペラの回転音みたいだった。

十

それは、空飛ぶ装甲兵だった。

腹の辺りにスクリーンが付いている。

中には、赤黒い髪のアイーシャが映っていた。

何だか、とてつもなく晴れやかな顔をしていた。

《元気しているかしら？》

ケルベロスは不機嫌そうな顔をして、首を横に振る。

彼女達には、結局の処、敗北に追い込まれた。だからとても苦渋を飲んでいる。

「お陰様で、俺達は窮地に追い込まれているというわけだ。お前は何の用だ？」

装甲機械は、翼をばたばたとためかせる。

まるで、何か滑稽な動きをしている。

《まあ、貴方達にとって、とっても良い知らせなんだけれども。単刀直入に言うとね、私とグリーン・ドレスはダートを裏切った。つまり、貴方達の敵は大幅に減ったというわけ》

ケルベロスは、はあ？ と裏返ったような声を出す。

「裏切った.....？」

《ついでに、ルブルとメアリーも結構、重症かも。あの城、破壊しまくったし。そうそう、グリーン・ドレスは、しばらくは破壊行為を止めるってさ。遊びに飽きてきたんだって、だから、私達はドーンとの対立を止める。それでいいかな？ じゃあ、そういう事で》

それだけ言うと、アイーシャの装甲機械は、ばしゅばしゅ、ばしゅばしゅっ、と機械内部での破壊音が鳴って、地面へと落下していき、それきり動かなくなっていく。

しゅうしゅうっ、と煙が上がっていき。しばらくの間、沈黙が訪れる。

ケルベロスは頭を抱えて項垂れていた。

好き勝手に、振り回されてしまった気分だ。

どうしようもない程の、倦怠感というか虚脱感に襲われる。

後ろでは、インソムニアが、ぽんぽんと彼の肩を叩いて大笑いをしているのだった。

To be continued